

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進地区名	推進校名	児童生徒数
苫小牧市	苫小牧市立若草小学校	392
苫小牧市	苫小牧市立苫小牧東小学校	238
苫小牧市	苫小牧市立苫小牧東中学校	320
森町	森町立さわら小学校	223
森町	森町立砂原中学校	121
雄武町	雄武町立雄武小学校	160
雄武町	雄武町立雄武中学校	101

○ 調査研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 本調査研究を適切に行うための推進地域としての体制整備

「北海道学力向上推進協議会」を開催し、推進地区及び推進校に対する指導助言及び本調査研究の成果等の検証を行った。

① 各推進地区において、調査研究を円滑に実施することを目的に関係者による実務者レベルのワーキングチーム会議を開催し、本庁指導主事等が、事業内容等について説明や指導助言を行った。

- ・ 苫小牧地区ワーキングチーム会議：平成25年7月31日（水）
- ・ 森地区ワーキングチーム会議：平成25年8月15日（木）
- ・ 雄武地区ワーキングチーム会議：平成25年8月16日（金）

② 本事業関係者や大学教授、学校力向上総合実践事業（注1）の管理職、PTA関係者等で構成した「北海道学力向上推進協議会」を開催し、各推進校の取組に対

する指導助言等を行った。

・第1回：平成25年10月7日（月）

・第2回：平成26年2月17日（月）

- ③ 各推進校の研究推進担当者を集めて取組状況の進行管理を行うことを目的にワーキングチーム会議を開催し、各学校の進捗状況や今後の重点的な取組について協議及び指導助言を行った。また、学校力向上に関する総合実践事業（注1）との関連を図るため、当該事業の研修会にも参加し、研修を深めた。

・平成25年12月17日（火）

(2) 推進地域としての支援策

① 教育課程・指導方法

・全国学力・学習状況調査の教科に関する調査結果を詳細に分析することができる「分析ツール 北海道版」（注2）を提供し、自校の調査結果に基づく分析資料を作成させることにより、各推進校の基礎学力定着に係る課題の明確化を図る取組を支援した。

・推進校に対して、平成26年度全国学力・学習状況調査結果の分析を踏まえた「学校改善プラン」を改善させることにより、課題解決に向けた具体的な取組の明確化を図る推進校の取組を支援した。

・北海道独自の基礎問題チャレンジテスト（注3）を北海道学力向上Webシステム（注4）で配信し、推進校に積極的に活用させることにより、児童生徒一人一人のつまずき等を把握し、基礎学力保障の取組が促進されるよう支援した。

② 教育課程外の補足的な学習サポート

・補足的な学習サポートの内容や回数の充実を図るよう指導助言するとともに、補足的な学習サポートの参考事例を提供し、授業以外の学習時間の確保に向けた推進校の取組を支援した。

③ 家庭や地域との協働関係の構築

・学習時間や読書時間などの目安を示した資料や、生活リズムチェックシート（注5）を提供し、家庭での生活リズムの確立を図る推進校の取組を支援した。

・全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査の結果を詳細に分析することができる「分析ツール 北海道版」（注2）を提供し、自校の調査結果に基づく分析資料を作成させることにより、各推進校の生活リズムに関する課題の明確化を図った。

・雄武地区において開催した学校関係者や保護者、地域住民等を参加対象とした教育講演会に本庁幹部を講師として派遣し、本道の児童生徒の学力や生活習慣の課題、基礎学力問題は地域の発展にもつながることなどについて講話した。

④ 推進地区及び推進校への指導助言の充実

推進校に対しては指導主事による学校訪問の回数を増やし、進捗状況を把握するとともに、課題に応じて指導助言の充実を図った。

・森町：延べ7回訪問

・苫小牧市：延べ10回訪問

- ・雄武町：延べ7回訪問
- ⑤ 文部科学省や道教委が実施する他の事業との効果的な連携
 - ・指導方法工夫改善加配を推進校7校に合計11名配置するほか、国の定数加配を活用し若手教員等に対して指導を行う巡回指導教員を2校に2名配置し、推進校のティーム・ティーチングや習熟度別学習など個に応じた指導体制の充実を図った。
 - ・各学校の学力向上に向けた取組を支援する退職教員等外部人材活用事業により、外部人材等を3校に合計5名配置し、ティーム・ティーチングや放課後等の補足的な学習サポートなどの取組を支援した。

2. 推進地区における取組

(1) 本調査研究を適切に行うための推進地区としての体制整備

各推進地区において、本事業の円滑な実施のため、関係学校教職員、市町教育委員会職員、北海道教育庁職員等で構成する体制を次の通り整備し、推進校の取組への支援や成果の検証を行った。

- ・苫小牧市学力向上推進委員会
- ・森町砂原地区幼小中連携協議会
- ・雄武町学力向上推進協議会

(2) 推進地区としての支援策

- ① 市統一学力検査やNRT検査等の実施により、推進校の課題の明確化及び成果の検証等を支援した。
- ② 雄武町学力向上推進協議会において、保護者や地域住民と課題や危機意識を共有し、学校・家庭・地域・行政が一体となった学力向上に向けた取組を推進するため、道教委幹部を講師として招聘して教育講演会を開催した。
- ③ 秋田県内の学校や筑波大学附属小学校など、先進事例を学ぶため、推進校の教員を派遣した。

3. 推進校における取組

(1) 教育課程・指導方法

① 学力の現状及び課題の分析

- ・自校の学力の状況を分析し、課題の明確化を図るため、全国学力・学習状況調査の結果を詳細に分析できる「分析ツール 北海道版」(注2)を活用し、全国や上位県との比較が可視化できるレーダーチャートや自校の下位層の状況などが明らかになるグラフ等を作成した。
- ・道教委が配信しているチャレンジテストを活用し、苦手な問題等を把握した。
- ・市統一学力検査の結果から、一人一人の児童生徒の定着状況を把握した。
- ・基礎学力問題を作成し、基礎的基本的な内容のつまづきをチェックシートで把握し、個別指導に活用した。

② 授業改善の取組

- ・教員加配を有効に活用し、ティーム・ティーチングや習熟度別指導など、個に応じた指導の充実を図った。
- ・児童生徒に学習内容を確実に定着させる授業の在り方を研究するため、各推進校において、全ての教員が授業研究を行った。
- ・小中で連携して、系統性のある学習規律やノート指導の約束を作成し、一貫して指導した。
- ・全ての児童が分かる授業を目指し、授業のユニバーサル化を図った。

③ 学習内容の確実な定着を図る取組

- ・脳科学の知見を踏まえ、一定の期間を空けて同じ課題に繰り返し取り組ませ、定着の状況を検証した。
- ・各単元で身に付けさせたい最低限の内容を整理したマスタープリントを作成し、週に1回4週間に渡って繰り返し取り組ませ、定着を図った。

(2) 教育課程外の学習サポート

推進校において、授業以外の学習時間を確保し、学習習慣の定着を図ることを目的として、長期休業中や放課後等の学習サポートの回数や内容を充実させた。

① 長期休業中の学習サポートの充実

〈苫小牧市〉

- ・若草小学校：全学年を対象に夏期休業中3日間、冬期休業中2日間
- ・苫小牧東小学校：基礎学力の定着に課題のある児童を対象に、夏期休業中及び冬期休業中にそれぞれ2日間
- ・苫小牧東中学校：全学年対象の学習室と数学・英語の領域別補習講座を夏期休業中及び冬期休業中にそれぞれ20講座開設

〈森町〉

- ・さわら小学校：全学年を対象に夏期休業中及び冬期休業中にそれぞれ5日間
- ・砂原中学校：全学年を対象に夏期休業中19日間、冬期休業中8日間

〈雄武町〉

- ・雄武小学校：全学年を対象に夏期休業中及び冬期休業中にそれぞれ3日間
- ・雄武中学校：全学年を対象に夏期休業中3～5日間、冬期休業中4～8日間

② 放課後等における学習サポートの充実

〈苫小牧市〉

- ・若草小学校：全学年を対象に、月に1回20分間程度
：週に1回全校一斉に朝の5分間に100ます計算を実施
- ・苫小牧東小学校：児童個々の課題に応じて日常的に実施
：休み時間や給食準備の時間の個別の補充的な指導
- ・苫小牧東中学校：全学年を対象に放課後学習室を常設
：第3学年を対象に、数学科の朝学習及び英語科補習授業

〈森町〉

- ・さわら小学校：放課後算数教室を2時間程度104回
- ・砂原中学校：全学年を対象に放課後学習会を延べ115講座

〈雄武町〉

- ・雄武小学校：低学年・高学年のコースに分け週に1回実施
- ・雄武中学校：全学年を対象に延べ24コース

(3) 家庭や地域との協働関係の構築

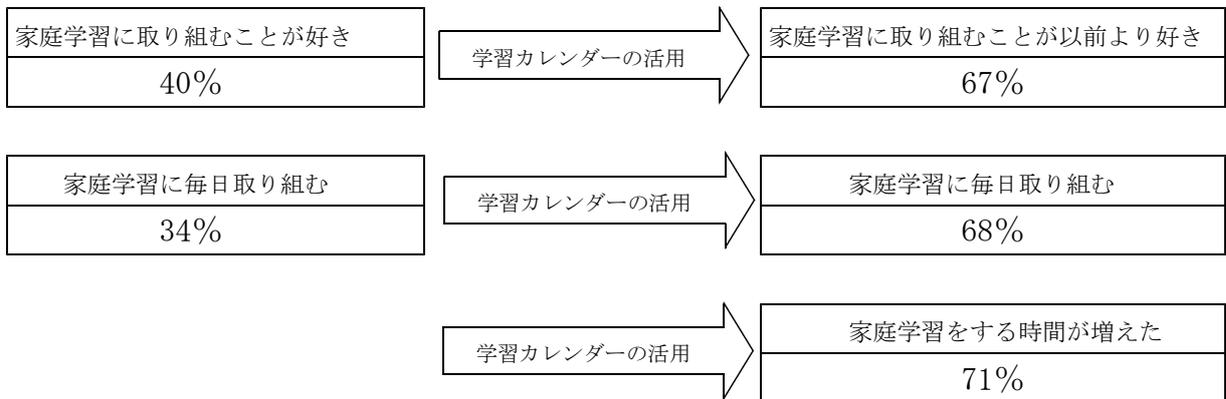
- ・保護者と連携して学習習慣を確立させることが必要であるため、「家庭学習の手引き」を改善・充実した。
- ・「学習カレンダー（注6）を作成し、小・中学校共通に活用させた。また、「学習カレンダー」活用の効果を検証するためにアンケートを実施した。
- ・道教委提供の「生活リズムチェックシート」（注5）を活用し、家庭での生活習慣を保護者と一緒に考える機会をつくった。
- ・雄武小学校では、「分析ツール 北海道版」（注2）で作成した資料を活用し、参観日の懇談会の際に各学級において学力向上をテーマにワークショップを開催した。

○調査研究の成果

1. 推進校における取組の成果

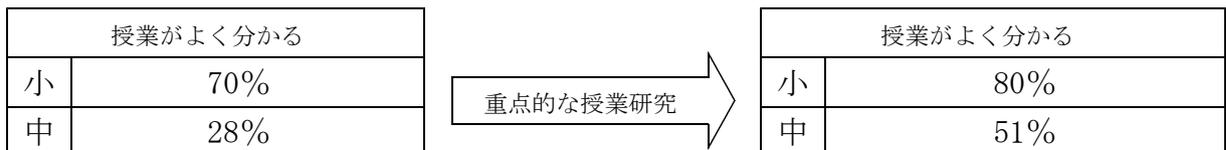
- ・家庭学習習慣の確立を目指す「学習カレンダー」（注6）に継続して取り組ませることにより、家庭で学習する機会が増加した。

〈家庭学習に関するアンケート結果（苫小牧市）〉



- ・一人一人の児童がよく分かる授業改善に向け、全教員による研究授業や、町内の教育研究大会における授業公開を行ってきたことにより、児童生徒が授業評価の結果が向上した。

〈児童生徒による授業評価（森町）〉



- ・脳科学の知見を生かし、基礎的・基本的事項の定着を図る家庭学習等の取組を計画的、継続的に行ったことにより、単元終了後の定着の状況を期間を空けても維持または向上させることができた。

<小学校における取組（雄武町）>

単元終了後の単元まとめのテストの誤答率	
技能	25%
考え方	39%

単元テスト終了後に約1か月間かけて4回の「マスタープリント」を実施。それを5単元で継続して実施。

学期のまとめのテストの誤答率	
技能	20%
考え方	35%

※5単元終了時に学期のまとめのテストを行っており、単元によっては最大で約3か月経過していることに留意する必要がある。

<中学校における取組（雄武町）>

4月のCRT調査の結果	
領域	全国比
数と式	99
図形	100
関数	107

各単元の基礎問題を作成し、単元終了後約1か月間かけて4回実施。それを7単元で継続して実施。

12月のCRT調査の結果	
領域	全国比
数と式	108
図形	117
関数	120

※同一の問題ではなく、範囲や時期が違うことから、全国の平均正答率を100として比較したことに留意する必要がある。
※第2学年を抽出

2. 調査研究全体の成果

- ・事業開始直後に、各推進地区に道教委職員が出向き、事業の円滑な推進について説明するなど「北海道学力向上推進協議会」や「ワーキングチーム会議」の計画的な開催及び継続的な学校訪問などにより、推進地区及び推進校に対するきめ細かな支援や、取組の検証を継続して行うことができた。
- ・所管の教育局が3つの推進地区に対して重点的に指導助言したことにより、取組の重点化が図られ、それぞれ一定の成果を見ることができた。
- ・推進校の教職員はもとより、推進地区全体で学力向上に係る課題や危機意識が共有されるようになった。
- ・市町の研究会等で研究成果を発表する機会を設定した。
- ・道独自の基礎問題「チャレンジテスト」（注3）の結果については、全道の平均正答数を下回る学校が多いものの、一部の学校・教科において全道を上回るほか、夏と比較して2校が2教科とも全道平均との差が縮まり、3校が1教科で縮まるなど、改善の兆しが見られてきた。特に中学校数学では、3校全てが改善した。

<チャレンジテストの平均正答数>

○小学校第5学年抜粋

	国語		算数	
	夏(H25.7~8月)	冬(H26.1~2月)	夏(H25.7~8月)	冬(H26.1~2月)
北海道	100.0(全15問)	100.0(全20問)	100.0(全15問)	100.0(全15問)
苫小牧市立若草小	91.3	94.8	96.5	100.0
苫小牧市立苫小牧東小	132.0	106.0	114.9	106.0
森町立さわら小	68.9	61.2	64.9	51.5
雄武町立雄武小	96.1	98.5	112.3	94.1

○中学校第3学年抜粋

	国 語		数 学	
	夏 (H25. 7～8月)	冬 (H26. 1～2月)	夏 (H25. 7～8月)	冬 (H26. 1～2月)
北海道	100.0 (全20問)	100.0 (全20問)	100.0 (全15問)	100.0 (全15問)
苫小牧市立苫小牧東中	93.6	90.4	73.7	83.1
森町立砂原中	72.8	80.1	72.6	83.1
雄武町立雄武小	100.8	98.6	107.4	115.7

※全道を100とした指数で算出 ※問題の難易度が違うため一概に比較できないことに留意する必要がある。

3. 取組の成果の普及

- ・市町の教育研究会等で研究成果を発表する機会を設定することにより、推進地区全体に成果を普及することができた。
- ・平成26年度の市の研修講座において、推進校による発表を設定する。
- ・本取組の成果を、平成26年度の学力向上に向けた指定事業等において積極的に活用する。
- ・本取組の成果を整理し、道教委ホームページで情報提供する。

○ 今後の課題

- ・本年度の調査研究の取組の成果を、平成26年度の全国学力・学習状況調査の結果から、詳細に分析し、検証する必要がある。
- ・推進校に対して、事業終了後も継続して支援していく必要がある。
- ・道内の各市町村及び小・中学校において学力向上に係る明確な数値目標を設定し、保護者や地域住民と共有を図りながら、学校・家庭・地域が一体となって学力向上に向けた取組を一層推進する必要がある。
- ・週末を含めた継続的な家庭学習の取組や、学期末や学年末における相当量の復習期間の設定など、基礎学力を保障する取組を徹底する必要がある。
- ・学校全体での組織的なノート指導や学習規律の指導を徹底する必要がある。
- ・全国学力・学習状況調査問題を活用した道独自の基礎問題「チャレンジテスト」(注3)の内容や実施方法を一層工夫する必要がある。
- ・全国学力・学習状況調査において、顕著な課題が見られる市町村・学校や、一層学力向上が望まれる地域に対して、重点的な支援を継続する必要がある。
- ・各学校の学力向上を主に担当する教員に対して、全国学力・学習状況調査の分析方法や調査を効果的に活用した授業改善の在り方等について研修する機会を充実させる必要がある。

(注1) 学校力向上に関する総合実践事業

- ・管理職のリーダーシップの下で学校改善を推進することにより、当該校から将来のスクールリーダーを輩出する新たな仕組みを構築するため、道教委が指定する実践指定校において平成24年度から試行実施している事業

(注2) 「平成25年度全国学力・学習状況調査 北海道版 結果報告書」を活用した「分析ツール 北海道版」

- ・道教委が作成した、各市町村や学校が、自らの結果を詳細に分析できるよう、レーダーチャート、下位層の状況、学校間のばらつきなどのデータが簡単に作成できるツール

(注3) チャレンジテスト

- ・各学校や家庭において学力向上や学習習慣の改善に向けた日常的に取り組みやすい資料として、本道の児童生徒が苦手としている領域や学習内容を踏まえた国語や算数・数学の基礎問題
- ・平成21年度から継続して作成し、道教委Webページに掲載

(注4) 北海道学力向上Webシステム

- ・チャレンジテストの実施から集計・分析までの時間が短縮され、全道・管内と比べた自校の基礎学力を入力と同時に把握することができるとともに、集計結果を活用して、子どものつまずきに応じたきめ細かな指導や放課後等の補充的な学習サポートの充実などに生かすことができるシステム

(注5) 生活リズムチェックシート

- ・子どもの望ましい生活習慣等に対する関心や意欲を高め、その改善と定着することをねらいとして道教委が作成
- ・家庭での生活時間などを記入し、生活の様子を振り返ることができるもの

(注6) 学習カレンダー

- ・苫小牧地区で作成
- ・家庭学習に計画的に取り組ませることを目的として、内容や時間を記入することができる家庭学習の計画書

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
 「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
 平成25年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進地区名	苫小牧市
-------	------

○ 推進地区として実施した取組の内容

1 重点課題

苫小牧市においては、小学校第4学年から中学校第3学年の6年間を、小学校から中学校へ円滑な接続をするための重要な期間（「インプルーブ6（Improve 6）」）と位置付け、小・中学校による情報の共有、一貫性のある指導、継続した取組を推進する。

また、この6年間を「基礎期」（小学校第4・5学年）、「充実期」（小学校第6学年・中学校第1学年）、「発展期」（中学校第2・3学年）の3つのステージに区分することで、児童生徒の発達段階を踏まえ、これまでの学年・学校種を超えたスモールステップを意識した小中連携の実現を目指している。

平成25年度 苫小牧市学力向上アクションプラン

学びの意欲と確かな学力の向上



教育課程と学習指導要領	小・中学校間における学習指導要領の連携	学習指導要領の向上
<p>【学習指導要領（基礎期）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の育成（基礎力） 学習意欲の向上（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 	<p>【インプルーブ6（Improve 6）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 	<p>【基礎的な学力の向上（基礎力）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力）
<p>【学習指導要領（充実期）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 	<p>【インプルーブ6（Improve 6）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 	<p>【基礎的な学力の向上（基礎力）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力）
<p>【学習指導要領（発展期）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 	<p>【インプルーブ6（Improve 6）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 	<p>【基礎的な学力の向上（基礎力）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力） 基礎的な学力の育成（基礎力）

2. 重点課題への取組状況

(1) 推進校への指導助言

① 苫小牧市学力向上推進委員会の開催

- ・ 中学校が抱える学力定着に関する課題を共有するとともに、取組の方向性や今後の流れについて説明した。

期 日	内 容 等	備 考
4月30日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員の委嘱 ・ 今年度の活動について ・ 「インプルーブ6」の各発達段階における取組の明確化 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全国学力・学習状況調査の自己採点における結果の共有と課題の把握 ・ 発達段階を踏まえた学習規律の設定 	
6～8月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 苫小牧市統一学力検査の結果の共有と課題の把握 ・ 放課後及び長期休業中の補充的な学習の在り方 ・ 「乗り入れ授業」の計画 ・ 「学習カレンダー」を活用した家庭学習の定着 	
9～12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業交流 ・ 課題に基づいた授業実践 	
1～2月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究成果のまとめ 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究成果の発表 	市学力向上AP実践研究指定校発表会

② 推進校の会議への出席

- ・ 研究の進捗状況等を確認するとともに、連携に関する取組や北海道教育委員会主催会議の資料作成に関して指導・助言を行った。

回数	月 日	主 な 内 容
第1回	4月30日	第1回苫小牧市学力向上推進委員会
第2回	5月28日	学力向上に向けた連携の重点取組項目の検討
第3回	7月23日	各学校の研修の交流（ノート指導・家庭学習・学習規律）
第4回	8月26日	主要3項目に関する意見交換
第5回	9月19日	基礎学力調査の取扱い 全国学力・学習状況調査結果の交流
第6回	10月24日	北海道学力向上推進協議会で明確になった課題点の検証
第7回	11月28日	主要3項目に関する進捗状況確認
第8回	12月13日	学習カレンダーの試用結果の交流 学習規律一覧の確認
第9回	1月15日	学習規律最終検討 基礎学力調査検討 アンケート集計結果の考察

(2) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

① 基礎学力の向上・保障に向けた課題の明確化と改善方策の検討

【基礎学力調査（つまずきチェック）】

ア 目的

- ・ 基礎学力の定着が不十分な生徒の実態把握
- ・ 全国学力・学習状況調査及び苫小牧市統一学力検査の結果では把握できない個々のつまずきの原因を明らかにするための客観的なデータの収集

イ 取組状況

- ・ 今年度始めに実施した調査の結果の交流
- ・ 若草小学校を中心とした次年度の基礎学力調査の素案となる問題の作成

(3) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

① 学習規律の確立

ア 目的

- ・ 児童生徒の学力向上を目的とした、小・中学校における円滑な接続のための小・中一貫した指導の確立

イ 取組状況

- ・ 実践研究指定校間での学習規律に関する共通理解
- ・ 児童に対する「学習のやくそく」及び生徒に対する「学習三原則」「学習15カ条」の提示と指導実践

② 家庭学習の定着

ア 目的

- ・ 児童生徒の学力向上を目的とした、小・中学校における円滑な接続のための小・中一貫した取組

イ 取組状況

- ・ 実践研究指定校間での家庭学習に関する取組の共通理解
- ・ 計画的な学習を支援するための「学習カレンダー」を活用した家庭学習の実施

(4) 学習環境の整備・充実

① ノート指導の充実

ア 目的

- ・ 児童生徒の学力向上を目的とした、小・中学校における円滑な接続のための小・中一貫したノート指導の充実

イ 取組状況

- ・ 小・中学校におけるノート指導の交流
- ・ 苫小牧市作成の推進資料に基づいたノート指導の徹底

(5) 研究成果の普及

- ・ 苫小牧市教育研究所研修講座での研究成果の発表（平成26年5月27日）

3 調査研究の成果の把握・検証

(1) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

① 基礎学力の向上・保障に向けた課題の明確化と改善方策の検討

【基礎学力調査（つまずきチェック）】

- ・ 結果について小学校と交流し、定着が図られていない学習内容について見直しを行った。
- ・ 中学校からの取組であったが、小学校からの視点を盛り込むことができた。

1年1組 国語

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
基礎学力調査												
1. 漢字の読み書き												
2. 文章の理解												
3. 読解力												
4. 作文力												
5. 総合的な学習の時間												
6. その他												

(2) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

① 学習規律の確立

- ・ 生徒の授業に対する姿勢に課題があったため、中学校において学習規律を徹底する取組が始まったが、小学校とも課題を共有する中で同様の取組を行うことができた。
- ・ 児童生徒に学習規律を意識する様子が見られた。
- ・ 授業開始前の準備や集中した聞き取りができるようになった。

山形県立中央高等学校 学習規律調査結果

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
授業開始前の準備												
授業中の集中力												
授業中の聞き取り												
授業後の振り返り												
その他												

山形県立中央高等学校 学習規律調査結果

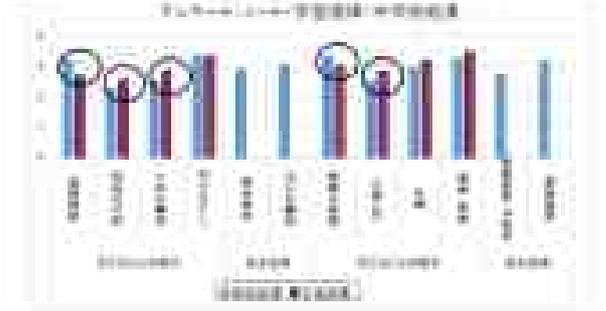
項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
授業開始前の準備												
授業中の集中力												
授業中の聞き取り												
授業後の振り返り												
その他												

山形県立中央高等学校 学習規律調査結果

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
授業開始前の準備												
授業中の集中力												
授業中の聞き取り												
授業後の振り返り												
その他												

山形県立中央高等学校 学習規律調査結果

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
授業開始前の準備												
授業中の集中力												
授業中の聞き取り												
授業後の振り返り												
その他												

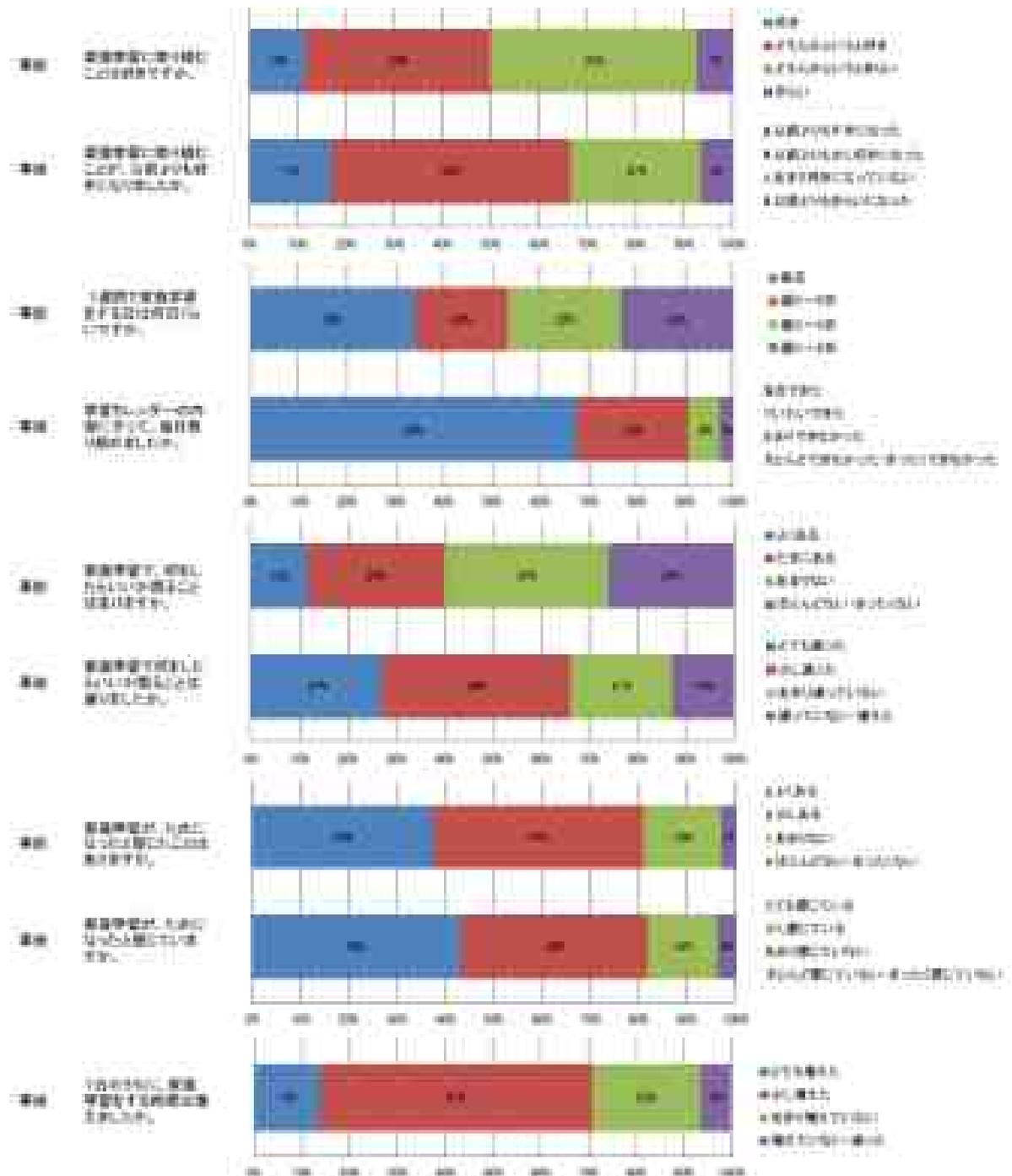


② 家庭学習の定着

- ・ 先行的に行っている中学校においては、1学期の反省を基に個に応じた「学習カレンダー」の活用となるよう担任及び教科担任が助言を行うことで、生徒自身が学習計画を立てられるようにするなど改善を図ることができた。
- ・ 小学校においても「学習カレンダー」を活用したところ、家庭学習に対す

る意欲が高まり、家庭学習の機会及び時間が増えた。また、教師が学習内容を提示することで学習内容が明確になり、意欲化につながった。

学習力レインダー調査アンケート集計結果（ elementary school - elementary school 6th grade survey）



(3) 学習環境の整備・充実

① ノート指導の充実

- ・ 小・中学校の教師によるノート指導の交流により、中学校への円滑な接続のためには、小学校において中学校でのノートづくりを見据えたきめ細やかなノート指導を行う必要があることを共有できた。
- ・ 6年生時でのノート指導に関して2つの小学校で共通理解が図られた。
- ・ 児童生徒に、ノート作りの工夫が見られるようになってきた。

4 今後の課題

(1) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

① 基礎学力の向上・保障に向けた課題の明確化と改善方策の検討

【基礎学力調査（つまずきチェック）】

- ・ 調査及び集計を簡素化することで負担を減らし結果の活用を早期に進め、早い段階で児童生徒の状況を把握し、基礎学力定着に向けた方策につなげていく。
- ・ 現在は「充実期」に焦点化して進めているが、次年度以降は基礎期や発展期においても把握を進め、経年変化なども追いながら、個々の児童生徒の基礎学力定着につなげていく。
- ・ 基礎学力調査の素案となる問題を活用し、各学年の児童に対して、学年末・学年始め休業中の「課題」を作成し、市内に発信していく。

(2) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

① 学習規律の確立

- ・ 授業中の作業の切り替えに課題が見られるため、小・中学校が共通の視点として授業改善に当たっていくよう指導・助言を行う。
- ・ 小・中学校で差異がある「授業の切り替え」や「授業開始前の準備」に関して考察を深め、改善につなげていく。

② 家庭学習の定着

- ・ 家庭学習がためになると感じている割合が、学習カレンダーの事前と事後で大きな変化が見られなかったことから、児童生徒自身が課題を設定し、日常の授業に生きる家庭学習の工夫を今後も進めていく。

(3) 学習環境の整備・充実

① ノート指導の充実

- ・ 既習事項の確認としてノートを活用する割合が小・中学校で開いていることから、今後、具体的な指導について交流を深めていく。
- ・ 小・中学校に共通して考えの記述が少ないという結果が出ていることから、思考を促す発問や考えをもたせ交流する活動を積極的に取り入れるよう、指導・助言する。

(4) その他

① 体制（組織力）の充実

- ・ 持続可能な取組とするためにも、小中連携に関する分掌を設けた運営の在り方を提案する。
- ・ 小・中学校間での乗り入れ授業を充実するための方策を検討する。
- ・ 充実期での取組から明らかになった課題を基に、基礎期や発展期でのより具体的な指導について検討を進める。

② 地域・家庭との連携

- ・ 中学校区での連携した取組内容や連携に関するアンケート結果などをわかりやすくまとめ、地域や家庭に積極的に発信する。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進校名	北海道苫小牧市立若草小学校
------	---------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

児童生徒の学習意欲の向上と学習習慣の定着を図るための、発達段階を踏まえた小・中学校間における学習指導の連携の実現を目指す。

学習指導に関する小・中学校の円滑な接続を図ることで、児童生徒への過重な負担(学び方の学び直し等)が軽減し、学習に集中しやすい環境ができ、基礎学力の向上が図られると考え、小6(中1)を焦点とした授業の基盤整備に関する連携が課題である。

また、全校的な学力向上を図る取組として、教育課程及び学習指導の充実、補充的学習サポートの新設、ノート指導計画に基づいた板書指導の在り方、小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着等について、特に本校では校内研修の題材である算数科の指導を中心に実施・検証していくものとする。

2. 重点課題への取組状況

(1) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

① 基礎学力の向上・保障に向けた課題の明確化と改善方策の検証

【基礎学力調査(つまずきチェック)】

ア 全国学力・学習状況調査(6年)の分析

実施後すぐに自校採点を行い、結果を一覧にして全教職員で共有した。更に、道教委の「分析ツール」により児童質問紙と併せて課題を明確にした。家庭には個人票返却と共に課題と今後の指導方針を文書で通知し、協力を求めた。

イ 苫小牧市統一学力検査(4、5年～国語、算数)の分析

検査結果を学年で分析し、当該学年児童の課題と今後の指導改善について協議した。家庭には個人票返却と共に課題と今後の指導方針を文書で通知し、協力を求めた。

ウ 本校独自の学力検査(2、3年～算数)の分析

本校独自で2、3年の算数について市統一学力検査と同じ検査を行い、検査結果を学年で分析し、当該学年児童の課題と今後の指導改善について協議した。

② 基礎学力を保障する学習指導システムの構築

ア 算数科における指導過程の統一

全教員が行う校内授業研究を通じて、1時間の授業の指導過程内に「つかむ（課題）」「予想する（自分の考え）」「追求する・まとめる（まとめ）」「練習（問題）」を位置付け、児童の授業への意識高揚と思考の場の保障を図った。

イ 学校力向上に関する総合実践事業の成果等の研修

実践研究指定校の取組を研究主任より全体研修において全教員に紹介し研修を深めた。また、同じく全体研修において、苫小牧市教育委員会指導室指導主事より「苫小牧っ子学力UP!ハンドブック」に関する説明・指導を受けた。

(2) 教育課程外の補充的学習サポート

① 朝学習「全校100マス計算」の実施

毎週水曜日、全学級で5分間の100マス計算に取り組んだ。

② 放課後学習「チャレンジタイム」の新設

9月より月1回のペースで放課後20分間の「チャレンジタイム」を設定し、全学年が昇級・昇段式の計算問題に取り組んだ。不審者対策として終了後は一斉下校を行う。

③ 長期休業中の「サマースクール、ウインタースクール」の実施

全学年で夏期休業中に3日間、冬季休業中に2日間の補充学習日を設けている。自由参加であるが、特に前学期の学習の定着が不十分である児童について参加を学級担任より強く奨励した。

(3) 指導形態を位置付けた単元計画の作成

① 4～6学年の算数科については、原則として全ての授業を学級担任と指導工夫改善加配教員によるTT学習又は習熟度別学習で行った。全ての単元で事前にプレテストを、事後に児童による授業評価を行っており、特に手厚い指導を要すると予想される単元ではフリー教員を加え、2学級4コースでの習熟度別学習を行った。更に個別の支援を要する児童には特別支援教育支援員や、年度途中より配属された退職人材等外部人材活用事業派遣講師による支援を行った。

② 1～3学年の算数科についても、年度途中より配属された退職人材等外部人材活用事業派遣講師によるTT学習を導入した。

(4) 筋道を立てて考える力を育成するためのノート指導の工夫

全ての児童が同じノートを書けるための板書の工夫について研究した。「線は定規を使って引く。」「1時間の授業で見開き2ページに納める」などの基本的な指導事項が構築された。更に授業において「自分の考え」を記入する場面の導入の工夫を進めた。

(5) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

① 小中連携を意識した学習規律の徹底

苫小牧東中学校の「学習三原則」「学習のきまり15か条」を基に「学習のやくそく～守ろう5か条（決まり）がんばろう10か条（心構え）」の定着を図った。また、全ての教室に共通の「学習のきまり」を掲示し、指導の統一を図った。

② 家庭学習の定着

本校の「家庭学習の手引き」や「算数通信」を家庭に配布し協力を求めると共に、苫小牧東中学校の家庭学習支援ツールの「学習カレンダー」を本校においても試行した。特に

高学年においては学習カレンダーの導入により、大幅に家庭学習時間が増加した。

(6) 家庭や地域との協力関係の構築

4月には土曜日実施の参観日で「学校説明会」を実施し、学校改善プランについて説明、協力を求めると共に、学習カレンダーや生活リズムチェックシートの活用により、家庭学習や「早寝・早起き・朝ごはん+あいさつ」の生活習慣改善を目指した。

また、地域においては、地元老人会の協力による花壇作りや1年生との交流、担当町内会とPTAで構成するセイフティネットの活動、地域参観日（学校オープンデー）等の機会に学校の教育活動について説明し、理解と協力を求めた。

(7) 学習環境の整備・充実

北海道学力向上 Web システムによるチャレンジテストの活用と共に、今年度は研修部主導で本校独自の「学力基礎調査テストプリント集（全学年の国語・算数）」を作成した。

(8) 文部科学省が実施する他の事業との効果的な連携

「指導方法工夫改善加配」教員及び年度途中からの「退職人材等外部人材活用事業」講師を算数科のTT学習、習熟度別学習で活用している。

また、「『確かな学力の育成に係る実践的調査研究』における学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究」における北海道学力向上推進協議会ワーキングチーム会議においては、道内外の実践例や脳科学の知見を踏まえた課題学習の工夫等、多くの示唆をいただいた。

(9) 研究成果の普及

- ① 今年度の研究内容を網羅した研究集録による普及・啓発
- ② 平成26年度苫小牧市学力向上アクションプラン説明会における成果の発信
- ③ 学校ホームページによる発信

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 学校改善プランの教職員反省から

本校の学校改善プランの具体的方策26項目に関する教職員反省を、1学期末、2学期末の2回実施した。

① 1～2学期にかけて改善が見られた項目

- | | | | |
|------------|-----------|-------------|-----------|
| ・ 学習用具の徹底 | 3. 0→3. 4 | ・ 全員による授業公開 | 2. 5→3. 7 |
| ・ 学習規律の徹底 | 3. 1→3. 3 | ・ 教育支援計画の作成 | 2. 2→2. 7 |
| ・ ノート指導の工夫 | 2. 8→3. 1 | ・ 家庭学習の習慣化 | 2. 8→3. 1 |

② 1～2学期にかけて改善状況が不足していた項目

- | | | | |
|--------------------|-----------|--------------|-----------|
| ・ 朝の学習の徹底 | 3. 8→3. 3 | ・ 学力・体力調査の活用 | 2. 7→2. 3 |
| ・ 習熟度別指導における指導力の向上 | 3. 0→2. 6 | | |
| ・ 児童アンケートを活用した授業改善 | 3. 3→2. 8 | | |
| ・ 学習の見通しが持てる授業の工夫 | 3. 4→3. 3 | | |

※ 改善状況でポイントを下げた項目については、実施状況そのものは継続・活性化しているが、評価する教職員側の求める基準が高まったためと考えられる。年度末反省会議ではこの結果を踏まえ、3学期は更に一層の改善に向けて努力することとした。

(2) 児童・保護者・教職員アンケートの集計結果から

児童、保護者、教職員に共通の設問15項目についてアンケートを実施した。(4点満点)

【学力向上に関する項目】～(カッコ内半角数字)は前年度平均

- ・漢字や計算などの基本的な学習をしっかりと教えている。

児童3.75 (3.67) 保護者3.55 (3.39) 教職員3.35 (3.44)

- ・学習規律や学習のきまりをしっかりと指導している。

児童3.18 (3.13) 保護者3.45 (3.28) 教職員3.40 (3.31)

- ・コース別や複数指導など、指導を工夫している。(今年度初出)

児童3.55 保護者3.36 教職員3.55

- ・進んで家庭学習に取り組んだ。

児童3.17 (3.11) 保護者3.22 (3.11) 教職員3.00 (3.18)

- ・地域の施設や人材を活用した学習に取り組んだ。

児童2.64 (2.66) 保護者3.12 (3.16) 教職員2.75 (2.80)

※ 基本的な学習についての児童評価3.75は、全項目中最高点であった。地域人材や施設を活用した学習については、全体計画が不透明であった点が反省点である。

(3) 国語・算数の単元テスト学期平均値の比較から

【学校目標値85%に達しなかった学級と教科～1学期】

2-1算数、2-2算数、3-1国語、3-2国語・算数、4-1国語・算数、
4-2算数、5-2算数、6-1算数、6-2算数

【学校目標値85%に達しなかった学級と教科～2学期】

2-1算数、3-2国語、4-1国語、4-2算数、5-1国語、5-2国語・算数、
6-1国語、6-2国語

※ 算数の学習については1～2学期にかけて大きく改善の傾向が見られるが、国語については逆に目標達成値が下がっている傾向が見られる。

(4) 算数科における単元学習前プレテストと単元学習後の児童の自己評価カードの比較から

① 4年生「1より大きい分数」

プレテスト正答率	4-1	76%	学習後充足度	4-1	90%
	4-2	86%		4-2	87%

② 5年生「平均とその利用」

プレテスト正答率	5-1	68%	学習後充足度	5-1	89%
	5-2	68%		5-2	86%

③ 6年生「資料の調べ方」

プレテスト正答率	6-1	72%	学習後充足度	6-1	75%
	6-2	71%		6-2	85%

※ 習熟度別学習を通じて、プレテストの正答率以上に児童の学習意欲や学習後の達成度が大きく向上していることが明確である。

4. 今後の課題

本校の平成25年度研究主題「考えを広げ、生き生きと表現する子どもの育成 ～意欲的に学び、身に付けた力を発揮する算数科の授業づくり～」の「目指す子ども像」3本の柱に沿って、次年度への課題と対策を述べる。

(1) 基礎的・基本的な知識・技能を主体的に身に付ける子ども

全国学力・学習状況調査における「算数A」問題の克服は、本校児童の積年の課題である。平成22年度から25年度までに「全国比-13.4→8.3→5.0」と徐々に改善されてきているが、26年度は全国平均値をたとえ0.1ポイントでも上回ることができるような指導の工夫を行う。

- ① 100マス計算、放課後学習「チャレンジタイム」の実施を継続すると共に、道チャレンジテストや若草小基礎学力チェックテストを活用し、網羅的な基礎計算問題の指導を徹底する。
- ② TT学習、習熟度別学習により、基礎的・基本的な知識・技能の定着において個別に支援が必要な児童へのきめ細かな学習指導を更に充実させる。

(2) 思考力・判断力・表現力を伸ばし、進んで問題解決に取り組む子ども

国語科・算数科を中心に、全学年の授業の課程において「児童が自分の考えを書いたり発表したりする課題と時間」を保障する。

- ① 今年度の研究で培われた「若草小の授業展開」を改めて全教職員に定着させる。そのためにも、次年度転入教員のための「模範授業の公開」を1学期早期に実施する。
- ② 「全教職員による公開授業」の方針を次年度も継続するが、主題に沿って「提案型の授業」を行うよう意識化を図り、実践の検証と工夫・改善に努める。

(3) 「わかる」「できる」喜びを感じながら、意欲的に学ぶ子ども

教室での一斉授業ではなかなか出番のない子どもが、習熟度別少人数学習の基礎コース教室では喜々として挙手し、自らのノートで学習の振り返りを行う姿勢を見せるようになった。

- ① 「ねらい」から始まり「自分の考え」を交流し、「まとめ」を経て「練習問題」を解けるようになるという基本的な授業の流れを定着させることで「わかる」授業を構築する。
- ② 「学習カレンダー」による家庭学習の習慣化や、授業と連動した学習課題の出題の工夫により、自分の力で「できる」子どもを育てていく。

更に今後は、平成25年度において小中連携による研究を進めてきた苫小牧市立苫小牧東小学校、苫小牧市立苫小牧東中学校と、各学力調査結果の経年比較データの交流や公開授業交流を中心に連携を深め、研究の深化を図りたいと考えている。



連携校研修担当教諭も参観した公開授業



水曜日朝の全校一斉100マス計算



昇段式問題の放課後学習チャレンジタイム



夏休みサマースクール2日目



退職教員等外部人材活用講師とのTT学習



第6学年習熟度別学習～ばりばりコース



第6学年習熟度別学習～じっくりコース



文部科学省調査官による習熟度別学習視察



授業における机上整理とノート指導の徹底

「確かな学力の育成に係る実践的な調査研究」における
「学力定着に課題のある学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進校名	北海道苫小牧市立苫小牧東小学校
------	-----------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

(1) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

まずは、各種調査の分析を通して本校児童の学力の状況を徹底的に把握することが課題である。その上で、本校児童の長所を生かしながら弱点を克服していけるような授業づくりを目指す。

具体的には、学習指導要領の趣旨や内容に沿った基礎学力を保障するシステムの構築、安定した授業の基盤条件の学校全体での整備、学校力向上に関する総合実践事業の実践指定校との連携、校内研修の見直し等の推進が課題である。また、全学級に設置された実物投影機を活用した授業づくりを今後も継続していく方針である。

(2) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

児童生徒の学習意欲の向上と学習習慣の定着を図るための、発達段階を踏まえた小・中学校間における学習指導の連携の実現を目指す。

学習指導に関する小・中学校の円滑な接続を図ることで、児童生徒への過重な負担（学び方の学び直し等）が軽減し、学習に集中しやすい環境ができ、基礎学力の向上が図られると考え、小6（中1）を焦点とした授業の基盤整備に関する連携が課題である。

具体的には、学習規律の確立、家庭学習の習慣の定着等を中心として、苫小牧東中学校・若草小学校と連携し、取組を推進していく方針である。

(3) 学習環境の整備・充実

学力向上のためには、児童の基本的な学習環境の整備と充実が求められる。中でも本校では、学習規律の確立、家庭学習の習慣の定着、ノート指導の充実に重点的に取り組んでいく。

学習規律については、苫小牧東中学校・若草小学校と連携し、発達段階に応じた小・中学校の一貫した学習規律を設定していくことが課題である。

家庭学習については、宿題等を中心として家庭学習の習慣の定着を図りながら、苫小牧東中学校で取り組んでいる「学習カレンダー」の取組を効果的に活用したい。

ノート指導については、教員間で指導観の共通理解を図り、系統的な指導を目指すと共に、苫小牧東中学校、若草小学校と情報交換を密にし、小・中学校の円滑な接続を図る。

(4) 教育課程外の補足的学習サポート

学力向上、特に様々な課題のある児童への支援には、教育課程外の補足的学習サポートが必要である。そのために本校では、放課後や長期休業中のサポート学習を実施していきたい。また、それらの適切な時期や回数等の検討も課題である。

(5) 並行読書を取り入れた学習展開の推進

読解力や学習態度、情操面の育成に対する読書の効果は大きい。本校では、児童の読書環境を整備し、進んで読書に親しもうとする態度を育むと共に、学校図書館専任教諭を中心とし、学校図書館を効果的に活用した授業の展開を目指す。また、国語科において並行読書を充実させることで読書への関心を高めると共に、読解力や表現力を養っていきたい。

(6) 家庭や地域との協力関係の構築

学習環境の整備等を推進するに当たり、家庭や地域との協力関係の構築は非常に重要である。本校児童の学力や学習状況に関する情報、課題を共有し、協力して解決に向かわなければならない。

情報・課題の共有のために、各調査の結果やそれを分析したものを、家庭や地域に示していきたい。また、生活リズム実態調査を行って児童の生活習慣を把握し、課題のある家庭には、個別に指導していく方針である。

2. 重点課題への取組状況

(1) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

① 基礎学力の向上・保障に向けた課題の明確化と改善方策の検討

【基礎学力調査（つまずきチェック）】

今年度は、苫小牧東中学校で従来行っていた、特別に支援が必要な生徒や分野を分析するための調査である「つまずきチェック」を「基礎学力調査」と位置付け、調査結果の情報を提供していただいた。その結果を元に本校の学習指導の傾向を分析し、教員間で課題を共有すると共に、日頃の学習指導における授業改善に役立てた。

また、苫小牧東中学校、若草小学校と協力し、次年度以降の「基礎学力調査」の素案となる「基礎学力問題」を作成し、3校教員間で共有した。

【全国学力・学習状況調査及び苫小牧市統一学力検査】

4月に実施された苫小牧市統一学力検査の結果を、特に点数の低い問題を中心に分析し、国語、算数の学習指導における授業改善に役立てた。また、国語の結果分析を踏まえ、校内研修において論理的読解力の育成を研究主題に据え、授業研究会等を行った。

また、「分析ツール」を活用して全国学力・学習状況調査の分析を行い、教員間で本校児童の学力の課題を共有した。特に点数の低かった問題等については、細かな分析を行い、日常の授業改善に役立てた。

② 実物投影機の活用

本校で従来行ってきたICT機器の活用の研修の成果を生かし、全学級に設置された実物投影機を活用した授業を日常的に継続して行った。

(2) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

① 学習規律の確立

【学習規律に関する到達目標】

学習規律の定着と中1ギャップの低減を目的とし、苫小牧東中学校で従来取り組んできた学習規律に関する規則「学習15か条」に合わせる形で、小・中学校3校で協力し、「学習規律に関する到達目標」を設定した。これを小・中学校3校の教員間で共通理解した上で、学習規律に関する指導を行った。

【学習のやくそく】

小・中学校3校で協力し、中学校の「学習15か条」に合わせる形で児童に示す学習規律に関する決まり・心構えである「学習のやくそく」を設定した。これを小・中学校3校の教員間で共通理解した上で、次年度4月に小学校4年生以上の児童に配布することを確認した。また、学習規律に関する指導について、家庭への協力を求めるための文書を作成した。

② 家庭学習の定着

【学習カレンダーの試用】

望ましい家庭学習の習慣の定着と中1ギャップの低減を目的とし、苫小牧東中学校で従来取り組んできた「学習カレンダー」を6年生児童が試用する取組を、2・3学期に1週間ずつ実施した。その際、事前及び事後に児童向けのアンケートを実施し、家庭学習に関する習慣や態度を把握すると共に、「学習カレンダー」の効果と課題を分析した。また、アンケートによって集約した、中学校生活に向けての学習に関する不安や質問に対して、苫小牧東中学校3年生に回答してもらい、中学生からのアドバイスを6年生児童に還元した。

(3) 学習環境の整備・充実

① ノート指導の充実

小・中学校3校で、ノート指導の実践を交流し、教員間の情報共有を図った。また、小・中学校間でのノート指導に対する意見交流を行うことで、互いの指導法や指導観を相互理解することができた。

また、校内では、日常から取り組んでいる各学年・学級のノート指導の実践を交流し、本校としてのノート指導の共通指導項目を「東小の学習指導」として確認し合った。

② 学習規律の確立

「学習規律に関する到達目標」及び「学習のやくそく」により、本校教員間の共通理解を図り、日常の学習指導を行った。

③ 家庭学習の習慣の定着

「学習カレンダー」の試用を行うことで、6年生児童の望ましい家庭学習の習慣の定着及び中1ギャップの低減を図った。また、各学級の家庭学習の取組を紹介し合い、他校の家庭学習

の様子を知ること、日常の家庭学習に関する指導の改善に役立てると共に、本校としての家庭学習の共通指導項目を「東小の学習指導」として確認し合った。

(4) 教育課程外の補足的学習サポート

① 長期休業中のサポート学習

夏休み、冬休みに2日間ずつ、サポート学習を実施し、学習内容の弱点克服に課題のある児童への個別指導、長期休業中の学習習慣や学習態度の育成を図った。

② 放課後学習等

個々の児童の課題や学習状況に応じて、日常的に放課後の時間を活用した学習を行った。また、児童の実態に応じて、休み時間や給食前の時間などを活用し、授業だけでは足りない学習指導の補充を行った。

(5) 並行読書を取り入れた学習展開の推進

① 学校図書館の充実

学校図書館専任教諭（創意工夫加配教員）を中心に、児童用図書や学校図書館の環境整備を進めた。また、児童会活動等を活用して、スタンプカード等の活動を行い、児童用図書の貸出数増加に努めた。

② 国語科等の授業での図書活用

学校図書館専任教諭が中心となり、国語科等の授業に関連する図書を児童、学級担任に紹介し、単元の学習と並行して、関連図書の読書を推進した。

③ 創意工夫加配教員によるT・T指導

学校図書館専任教諭（創意工夫加配教員）と学級担任でT・Tを行い、読書の啓発や関連図書の紹介を行うことで、並行読書を取り入れた学習展開を推進した。



(参考) 単元の学習の関連図書

(6) 家庭や地域との協力関係の構築

① 各調査の情報と課題の共有

全国学力・学習状況調査及び苫小牧市統一学力検査の結果の分析について、地域、家庭に情報を提供し、課題を共有した。

② 生活リズム実態調査の実施

生活リズム実態調査を行って児童の生活習慣の実態を把握し、教員間で課題を共有した。課題のある家庭には、個別に指導を行った。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

① 基礎学力の向上・保障に向けた課題の明確化と改善方策の検討

【基礎学力調査（つまずきチェック）】

苫小牧東中学校の「つまずきチェック」の結果を基に本校の学習指導の傾向を分析し、教員間で課題を共有することで日常の学習指導の授業改善等を行うことができた。また、次年度以降の「基礎学力調査」の素案となる「基礎学力問題」を設定し、3校教員間で課題を共有することで情報交換の効率化が図られた。

課題の共有や授業改善、情報交換の効率化等の成果が形となって現れるのは、次年度以降であると考えられる。

【全国学力・学習状況調査及び苫小牧市統一学力検査】

苫小牧市統一学力検査の結果の分析や、全国学力・学習状況調査の「分析ツール」を活用した分析、更には、本校独自の分析により、国語、算数の授業改善を行うことができた。また、国語の結果分析を踏まえ、校内研修において論理的読解力の育成を研究主題に据え、授業研究会等を行うことで、本校の国語科の授業や指導課程の課題の共有や、効果的な指導方法の共通理解を行うことができた。

授業改善や課題の共有等の成果が形となって現れるのは、次年度以降であると考えられる。

② 実物投影機の活用

全学級に設置された実物投影機を活用した授業を日常的に継続して行うことで、教材の提示を円滑に行うだけでなく、授業の内容の効率化を図ることができた。

(2) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

① 学習規律の確立

【学習規律に関する到達目標】

「学習規律に関する到達目標」を設定することで、基本的な学習規律の定着に努めることができた。

今年度から実施した取組のため、その成果を児童の変容として捉えられるのは、次年度以降である。また、取り組む前から達成できていた部分もあるため、その部分については、明確な変容は見られないと分析している。

【学習のやくそく】

「学習のやくそく」を設定することで、小・中学校3校の教員間で共通理解することができた。実際に4年生以上の児童に配布するのは次年度4月であるので、成果が現れるのはそれ以降である。

② 家庭学習の定着

【学習カレンダーの試用】

苫小牧東中学校で従来取り組んできた「学習カレンダー」を6年生児童が試用する取組を、2・3学期に1週間ずつ実施することで、6年生児童が中学校での家庭学習の様子を知ることができた。また、普段望ましい家庭学習の習慣が身に付いていない児童は、この取組を通して自己の家庭学習を見直すことができた。

(3) 学習環境の整備・充実

① ノート指導の充実

小・中学校3校でのノート指導の実践交流、及び小・中学校間でのノート指導に対する意見交流、「東小の学習指導」の設定を行うことで、課題や指導法、指導観を相互理解することにより、各学級での日常のノート指導を改善することができた。

② 学習規律の確立

「学習規律に関する到達目標」及び「学習のやくそく」によって、本校教員間の共通理解を図ることで、日常の学習指導を行うことができた。

③ 家庭学習の習慣の定着

「学習カレンダー」の試用を行うことで、6年生児童の望ましい家庭学習の習慣の定着及び中1ギャップの低減を図ることができた。家庭学習の取組の交流や「東小の学習指導」の設定によって、日常の家庭学習に関する指導を改善することができた。

(4) 教育課程外の補足的学習サポート

① 長期休業中のサポート学習

夏休み、冬休みに2日間ずつ、サポート学習を実施することで、学習内容の弱点克服や課題のある児童への個別指導、長期休業中の学習習慣や学習態度の育成を図ることができた。

(参考) 長期学習中のサポート学習参加人数 (2日間の延べ人数)

学年	夏休みサポート学習 (人) (7/26、29)	冬休みサポート学習 (人) (12/26、27)
1	3 1	2 3
2	4 0	4 3
3	3 6	3 2
4	2 4	3 5
5	4 4	2 7
6	3 7	4 4
計	2 1 2	2 0 4

② 放課後学習等

放課後や休み時間、給食前の時間などを活用して個別指導を行うことで、個別の課題を解消したり、日常の学習で不足している部分を補充したりすることができた。

(5) 並行読書を取り入れた学習展開の推進

① 学校図書館の充実

児童用図書や学校図書館の環境整備の推進、スタンプカード等の活動により、図書の貸出数が増加するなど、読書への意欲が高まった。

(参考) 図書室環境整備の様子



(参考) 学校図書館の本の貸出数
年度別貸出数 (2学期末まで)

(年度)	貸出数 (冊)	児童1人当たりの 貸出数 (冊/人)
H22	6638	2.5
H23	7728	3.1
H24	9891	4.0
H25	10829	4.5

② 国語科等の授業での図書活用

国語科等の授業に関連する図書の紹介により、児童の関連図書への関心や読書意欲を高めると共に、単元の学習の理解を促進することができた。

③ 創意工夫加配教員によるT・T指導

創意工夫加配教員を活用したT・T指導による並行読書の推進により、児童の関連図書への関心や読書意欲を高めることができた。

(6) 家庭や地域との協力関係の構築

① 各調査の情報と課題の共有

全国学力・学習状況調査及び苫小牧市統一学力検査の結果や分析等の情報を共有することで、本校及び地域の学力の課題を共有することができた。

(参考) 保護者アンケート「(本校は) 読み・書き・計算など基礎的・基本的な学習内容の定着を図っている」87% (H24) → 90% (H25)

② 生活リズム実態調査の実施

生活リズム実態調査により、児童の生活習慣の実態の把握、課題の共有を行うことができた。課題のある家庭に対して、個別に指導を行うことができた。

個別指導の成果が児童の変容として現れるのは次年度以降であると考えられる。

4. 今度の課題

(1) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

① 基礎学力の向上・保障に向けた課題の明確化と改善方策の検討

【基礎学力調査 (つまずきチェック)】

これまで苫小牧東中学校で実施してきた「つまずきチェック」は、本来、特別に支援が必要な生徒や分野を分析するための調査であった。そのため、客観的に評価したり、継続的に取り組んで結果を比較したりするには、問題の内容や集計方法、評価の規準と言った面で課題があった。今後、苫小牧東中学校、若草小学校と協力し、これらの課題を解消した「基礎学力調査」を作成する。次年度は、そのたたき台となる調査問題を作成、実施し、その反省を踏まえて内容を修正し、平成27年度には、「基礎学力調査」の完成版による調査を実施する。

また、次年度の全国学力・学習状況調査の結果等により、今年度情報を頂いた「つまずきチェック」の分析による授業改善の成果を評価する。

【全国学力・学習状況調査及び苫小牧市統一学力検査】

全国学力・学習状況調査及び苫小牧市統一学力検査の分析を踏まえた授業改善の成果を、次年度の諸調査の結果によって評価する。その中で、レーダーチャートによる分析は、視覚的に誤った印象を受けることがあるため、これまで以上に細やかな分析を並行して行う。ただし、本校のような中規模の学校の場合、個々の点数が統計的に与える影響が大きいため、全体の数値ばかりでなく、個々の問題や個別の児童に着目するなど、丁寧に分析する。

② 実物投影機の活用

今後も、全学級に設置された実物投影機を活用するだけでなく、活用法を校内研修の場で交流するなど、効果的な利用方法を模索し、教員間で共通理解を図る。

(2) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

① 学習規律の確立

【学習規律に関する到達目標】

本年度中に3校で設定した「学習規律に関する到達目標」を年度始めに各校で確認し合い、全教員の共通理解の下に学習指導を進める。また、各校の教員に広く意見を求め、適宜加除修正を行ってよりよいものにすることが課題である。

【学習のやくそく】

次年度当初に、「学習のやくそく」を本校及び若草小学校の4年生以上の児童に対して配布する。また、それに併せて、4年生以上の保護者に対しても内容を示す文書を配布し、家庭との協力の下に学習規律の確立に努める。また、各校の教員に広く意見を求め、適宜加除修正を行ってよりよいものにしていく。

「学習のやくそく」による指導を進める上で、適宜3年生以下の児童に示す方法や、児童会を活用した取組についても、模索する。

② 家庭学習の定着

【学習カレンダーの試用】

「学習カレンダー」を6年生児童が試用する取組を、各学期に1週間ずつ、合計年3週間実施する。また、学習カレンダーの取組を参考に、各学級で、より効果的な家庭学習の取組を模索する。

(3) 学習環境の整備・充実

① ノート指導の充実

次年度は、年度始めに「東小の学習指導」を教員間で再確認すると共に、校内研修の中でノート指導に関する研究を進める時間を確保し、「東小の学習指導」の中のノート指導の項目を改善したり理解を深めたりすることで、より効果的な指導を行う。また、本校で確認できたことを苫小牧東中学校や若草小学校と情報交換する。

② 学習規律の確立

次年度始めに、「学習規律に関する到達目標」及び「学習のやくそく」を本校教員間で共通理解することで、全教員が一体となって日常の学習指導を行う。

③ 家庭学習の習慣の定着

次年度始めに、「東小の学習指導」を全教員で確認すると共に、内容について再検討し、適宜加除修正を行う。また、有効な取組については、苫小牧東中学校、若草小学校と情報交換を行う。

(4) 教育課程外の補足的学習サポート

① 長期休業中のサポート学習

次年度も引き続き、長期休業中のサポート学習を行う予定である。その際に、時期、期間、時間、学習内容等についての意見を広く求め、より有効な取組となるように実施方法を改善する。

② 放課後学習等

引き続き、各学級担任の裁量のもと、個別指導が必要な児童等に対して、放課後や休み時間、給食前の時間を有効に活用して補助的な指導を行う。

(5) 並行読書を取り入れた学習展開の推進

① 学校図書館の充実

引き続き、学校図書館専任教諭を中心として、児童会等を活用した読書の啓発活動を行う。

② 国語科等の授業での図書活用

引き続き、学校図書館専任教諭からの図書の紹介等を積極的に行い、国語科等の授業で関連図書を有効に活用する。

(6) 家庭や地域との協力関係の構築

① 各調査の情報と課題の共有

引き続き、全国学力・学習状況調査及び苫小牧市統一学力検査の結果や分析等の情報を地域、家庭に公開していくことで、本校や地域の学力に関する課題の共有を推進する。

② 生活リズム実態調査の実施

次年度も、生活リズム実態調査を継続していく予定である。

今年度の調査で、課題のある家庭について把握できたが、個別の支援については、今後も継続して行う。また、参観日等の機会を利用し、生活リズムを整えることについて共通理解を図っていく。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進校名	北海道苫小牧市立苫小牧東中学校
------	-----------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

児童生徒の学習意欲の向上と学習習慣の定着を図るための、発達段階を踏まえた小・中学校間における学習指導の連携の実現を目指す。

学習指導に関する小・中学校の円滑な接続を図ることで、児童生徒への過重な負担(学び方の学び直し等)が軽減し、学習に集中しやすい環境ができ、基礎学力の向上が図られると考え、小6(中1)を焦点とした授業の基盤整備に関する連携が課題である。

また、全国学力・学習状況調査の結果から学力及び生活リズムに関する明確な数値目標を設定し、保護者と協力関係を構築しながら、基礎・基本の定着を図る必要がある。

2. 重点課題への取組状況

(1) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

① 基礎学力の向上・保障に向けた課題の明確化と改善方策の検討

【基礎学力調査(つまずきチェック)】

北海道教育委員会の「分析ツール」を活用し、自校の結果を詳細に分析し、教科部会と校内研修で共通理解を図り、全校で重点的な指導を行った。

(2) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

① 学習規律の確立

・ 本校の「学習三原則」と、この原則を元にした「学習のきまり15か条」を徹底して守らせ、どの授業でも同じ指導を行った。

② 家庭学習の定着

・ 継続的な家庭学習の課題を提示し、全学年で「学習カレンダー」を利用して毎日家庭学習を提出させ、その日に学んだ内容の定着化を図った。

(3) 学習環境の整備・充実

① ノート指導の充実

・ 苫小牧市教育委員会発行の「苫小牧っ子学力up!ハンドブック」を使って基礎学力定着に向けてノート指導の充実化を全職員で研修した。

(4) 補充的学習サポート

① 全学年対象に放課後学習を毎日実施し、長期休業中も英語・数学で領域別講座を開講した。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 学力向上を図る教育課程の編成・実施や学習指導の充実

① 基礎学力の向上・保障に向けた課題の明確化と改善方策の検討

【基礎学力調査（つまずきチェック）】

- ・ 2学期後半から3学期前半までの補習授業の参加人数が300人を超えて、アンケートで「きめ細かく教えてもらってよかった」と答えた生徒が90%となった。

(2) 小・中を見通した学習規律の確立と家庭学習の定着

① 学習規律の確立

- ・ 教師の指導だけではなく、生徒の自主的な活動を通して学習規律の徹底が図られた。「生徒意識調査」では、「生活面も含めて学校のきまりや約束を守っている」と答えた生徒が90%となった。

② 家庭学習の定着

- ・ 1年生対象の「学習カレンダー」に関するアンケートで「毎日何を練習したらよいかわかりやすかった」と答えた生徒が90%となった。

(3) 学習環境の整備・充実

① ノート指導の充実

- ・ 国語と数学の教科部会で、中学校1年生の最初の授業で使うノートと入学するまでに小学校で指導しておいてほしいことをまとめ小学校と交流した。

(4) 補充的学習サポート

- ・ それぞれの参加人数が昨年度に比べて3倍以上増え参加者のアンケートでは、「きめ細かく教えてもらえて参加してよかった」と答えた生徒が多かった。

4. 今後の課題

- ・ 学年単位の授業研修で基礎基本の充実化を図る指導を行ってきたが、更に授業改善の必要がある。
- ・ 保護者や地域住民と一体となった学力向上に向けた取組を一層充実させるため、「分析ツール」で作成した資料を活用し、本校の子どもたちの学力の状況を丁寧に説明する必要がある。
- ・ 生徒の計画表では1日の学習時間が短いため、更に指導が必要である。
- ・ 教師主導の受け身の学習になる傾向があるため、生徒が自主的に学び取る指導を工夫する必要がある。
- ・ 学校独自の基礎学力調査の問題を小学校の教科書のどの部分から抜き出し、どのくらいの正答率で定着しているか、などの調整に課題があった。

(様式 2)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」

平成 25 年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進地区名	森町砂原地区
-------	--------

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

町内幼稚園・小学校・中学校の確かな連携による学力の向上、学習習慣及び生活習慣の確立を目指す。

- (1) 学力向上を図る教育課程や学習指導の充実
- (2) 教育課程外の補足的学習サポートの充実（放課後、長期休業期間）
- (3) 授業改善と学習習慣・生活習慣の確立

2. 重点課題への取組状況

(1) 学力向上を図る教育課程や学習指導の充実

- ・小・中学校入学時の引継ぎはもとより、保育参観や授業参観を定期的に行い、砂原地区の子どもの実態等について、幼小中の教職員が情報を共有した。
- ・小学校の特別支援教育コーディネーターの保育参観等を積極的に行い、特別な支援を必要とする幼児について、幼小の教職員が情報を共有した。
- ・異校種間の交流活動を実施する際は、事前に打合せをしたり、事後に互いの意見や情報を十分に交換したりするなど、相互の連携を図った。
- ・小学校、中学校ともに全国学力・学習状況調査等の各種調査結果を踏まえ、チャレンジテストや各種調査の過去問題を活用し、各学年の学習内容の定着を図った。
- ・小学校は、「国語科授業のユニバーサルデザイン化」をテーマに校内研究を推進するとともに、放課後や長期休業期間に補足的な学習を実施した。
- ・中学校は、全国学力・学習状況調査等の各種調査結果を踏まえ、各教科において、習熟の程度に応じた学習課題プリントを作成し、授業で活用した。

(2) 教育課程外の補足的学習サポートの充実（放課後、長期休業期間）

- ・小学校は、「退職教員等外部人材活用事業」を活用するなどして、年104回、「放課後算数教室」を実施した。
- ・中学校は、放課後に週2日程度、夏季と冬季の長期休業期間に10日程度、補足的な学習を実施した。

(3) 授業改善と学習習慣・生活習慣の確立

- ・幼稚園は、小学校の「ユニバーサルデザイン化」を参考にするなどして、教職員の指示や掲示物の工夫改善に努めた。
- ・小学校は「授業のユニバーサルデザイン化」、中学校は「言語活動の充実」をテーマに校内研究を推進した。
- ・「砂原地区幼小中連携協議会」において、「統一して指導する事項」と「発達の段階に応じて各学校で指導する事項」について協議した。今後、保護者や地域住民に発信する予定である。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査結果の分析・考察

【小学校】

- ・全学年、平成24年度と比較し、「無回答率」が下がり、児童が最後まであきらめずに取り組もうとする意欲が高まった。
- ・第3学年は、NRT検査で平成24年度と比較し、国語科10.1ポイント、算数科で8.3ポイント偏差値平均が上昇した。
- ・児童アンケートでは、「漢字の力が付いてきた」と回答した児童が全学年80%以上となり、漢字に対する苦手意識が低下した。

【中学校】

- ・国語は55%の生徒の平均正答率が上昇し、正答率は74.5%から80.2%、数学は47%の生徒の平均正答率が上昇し、正答率は62.9%から71.3%に上昇した。
- ・生徒質問紙は、朝食を全く食べない生徒が0%、4時間以上TVゲームをする生徒が5.2%減少、2時間以上勉強する生徒が21.1%増加した。

(2) 推進校における短期・中期・長期の数値目標を踏まえた取組の点検・評価

【小学校】

- ・短期～漢字小テストの正答率を90%以上とする。75%→90%
- ・中期～各単元テストの正答率を85%以上とする。75%→85%
- ・長期～年間まとめのテストの正答率を80%以上とする。70%→80%

【中学校】

- ・短期～チャレンジテスト国語の得点比率を90%以上とする。76%→76%
チャレンジテスト数学の得点比率を90%以上とする。70%→65%
- ・中期～チャレンジテスト国語の得点比率を100%とする。76%→88%
チャレンジテスト数学の得点比率を100%とする。70%→85%
- ・長期～全国学力・学習状況調査の国語の慣用句に関する問題を90%以上とする。
75%→80%
全国学力・学習状況調査の国語の四則計算に関する問題を80%以上とする。
63%→81%

(3) 学校評価や児童生徒による授業評価の回答の分析・考察と実践成果の検証

【小学校】

- ・授業アンケートで「授業がよく分かる」と回答した児童が70%から80%となった。
- ・要因は、ユニバーサルデザインの活用による授業改善と考えられる。

【中学校】

- ・授業アンケートで「授業がよく分かる」と回答した生徒が28%から51%となった。
- ・要因は、生徒による授業評価を活用した指導方法の工夫改善に努めたためと考えられる。

(4) 推進校における公開研究会又は研究成果発表会の実践資料等の収集

【小学校】

- ・全教員の校内の研究授業はもとより、森町教育研究大会を含めて、年9回、授業を公開し、参加者から個に応じた指導を一層工夫する必要があるとの意見を得た。

【中学校】

- ・全教員の校内の研究授業はもとより、森町教育研究大会を含めて、年10回、授業を公開し、参加者から授業改善が学校全体の取組となっているとの意見を得た。

(5) 授業研究や研究報告の評価及び課題の把握と改善策の検討

【小学校】

- ・ユニバーサルデザインを活用した授業の終末部分を中心に学力向上を図る学習指導の在り方を継続して研究する。

【中学校】

- ・「言語活動」を位置付けた授業の展開部分を中心に学力向上を図る学習指導の在り方を継続して研究する。

(6) 道教委作成の「分析ツール」を活用した点検評価の取組

【小学校】

- ・国語は漢字の習得が課題であったが、単元テストで全国平均と同様という結果が得られた。
- ・算数は四則計算が課題であったが、単元テストで全国平均と同様という結果が得られた。
- ・質問紙調査で1日1時間以上勉強している児童が29%から39%となった。
- ・質問紙調査で家で学校の宿題をしている児童が91%から87%となった。

【中学校】

- ・短期～チャレンジテスト国語の得点比率を90%以上とする。76%→76%
チャレンジテスト数学の得点比率を90%以上とする。70%→65%
- ・中期～チャレンジテスト国語の得点比率を100%とする。76%→88%
チャレンジテスト数学の得点比率を100%とする。70%→85%
- ・長期～全国学力・学習状況調査の国語の慣用句に関する問題を90%以上とする。
75%→80%
全国学力・学習状況調査の国語の四則計算に関する問題を80%以上とする。
63%→81%

(7) 教育局と連携した推進校への定期的な学校訪問（年3回以上）による指導・助言

- ・全学級で学習規律が徹底され、学習環境が整備されるとともに、全学級で基本的な学習過程に基づく授業が行われるようになった。

(8) その他

- ・幼小中の教職員が砂原地区の子どもの情報を共有すること、互いの学習内容を理解することにより、各学校で統一して指導・支援すべきことを明確にすることができた。
- ・幼稚園では、基本的な生活習慣の確立、集団生活への適応に重点的に取り組んだことにより、小学校生活や中学校生活の基盤づくりを進めることができた。

- ・幼稚園と小学校の交流活動では、活動の前後の打合せと反省を通して、教職員が互いに、教育課程や指導方法の違いについて、理解を深めることができた。
- ・小学校と中学校での授業改善、補充的学習サポートや家庭学習の充実により、子どもの学習意欲が高まり、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ることができた。

4. 今後の課題

- 子どもの生活や学習状況をきめ細かく把握するため、年間複数回の生活アンケートや学力検査等の実施を検討する必要がある。
- 「砂原地区幼小中連携協議会」が砂原地区の子どもの健全育成と学力向上に資する組織となるよう、組織体制、実施回数、活動の実施方法や時期、内容を改善する必要がある。
- 砂原地区の子どもの健全育成と学力向上に向けた支援体制づくりを進めることができるよう、学校・家庭・地域との連携を一層強化する必要がある。

(様式3)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進校名	北海道森町立さわら小学校
------	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

- (1) 粘り強い学習力の育成(学ぶ心・学び方・学ぶ力)
- (2) 学力向上を図る教育課程や学習指導の充実
- (3) 教育課程外の補足的学習サポート
- (4) 推進地区における連携
- (5) 指導形態を位置付けた単元計画の作成
- (6) 学習規律の確立と家庭学習の定着
- (7) 家庭や地域との協働関係の構築
- (8) 学習環境の整備・充実
- (9) 文部科学省が実施する他の事業との効果的な連携
- (10) 研究成果の普及

2. 重点課題への取組状況

- (1) 粘り強い学習力の育成(学ぶ心・学び方・学ぶ力)
 - ・国語科の説明的な文章を中心に、全教員がユニバーサルデザインを活用した研究授業を行うとともに、学級経営の改善に向けた研修を実施した。
- (2) 学力向上を図る教育課程や学習指導の充実
 - ・「分析ツール」を活用して、全道と全国の比較から学力を分析し、重点的に指導する内容を明確にした。
 - ・第3学年、第5学年は、NRTを活用して、重点的に指導する内容を明確にするとともに、日常の授業改善に生かした。
 - ・チャレンジテスト、北海道学力向上Webシステムを活用して、児童の学習状況をきめ細かく把握し、日常の授業改善に生かした。
 - ・「朝の『集中タイム』」を設定し、漢字や四則計算のプリントやミニテストを実施し、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図った。
- (3) 教育課程外の補足的学習サポート
 - ・補足的な学習として、「放課後算数教室」を104回、長期休業期間は10日間実施し、各学年の学習内容の確実な定着を図った。
- (4) 推進地区における連携
 - ・「砂原地区幼小中連携協議会」で交流した各学校の子どもの実態を踏まえ、本校の「学習のきまり」を改善した。
 - ・年3回の幼稚園と交流活動、中学校での学習体験(第6学年)を計画的に実施するなど、異校種の学校との連携を強化した。

- (5) 指導形態を位置付けた単元計画の作成
 - ・国語科、算数科、理科において、習熟の程度に応じた指導を位置付けた単元の指導計画を作成し、個に応じた指導の充実に努めた。
- (6) 学習規律の確立と家庭学習の定着
 - ・家庭学習の定着を図るために、「家庭学習の手引き」を改善し、全家庭に配布するとともに、保護者懇談会等で説明した。
- (7) 家庭や地域との協働関係の構築
 - ・全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の分析結果を掲載した学校通信を校区内の全戸に配布し、保護者や地域住民に協力を働きかけた。
 - ・北海道教育委員会の「生活リズムチェックシート」を配布し、保護者の協力を得ながら、児童の学習時間や睡眠時間を確保するよう指導した。
- (8) 学習環境の整備・充実
 - ・すべての児童が分かる授業とするため、学習課題をしっかりと板書するとともに、学習内容や学習の流れを視覚的、構造的に掲示するなどの工夫をした。
- (9) 文部科学省が実施する他の事業との効果的な連携
 - ・「指導方法工夫改善加配」の効果的な活用として、算数科でティーム・ティーチングを行い、学習内容の確実な定着を図った。
- (10) 研究成果の普及
 - ・本年度の研究成果を町内の学校はもとより、管内の学校を対象とした「研究成果発表会」を実施する。
 - ・町校長研修会の機会を活用して、各学校の校長を対象としたプレゼンテーションを実施する。

3. 調査研究の成果の把握・検証

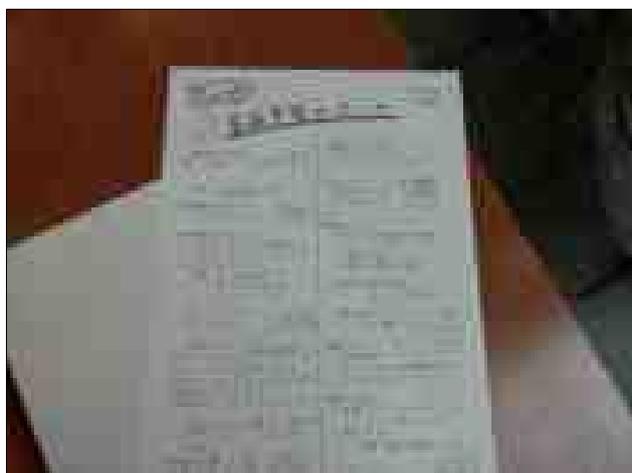
- (1) 全国学力・学習状況調査結果の分析・考察（各種調査や単元テスト等）
 - ・全学年、平成24年度と比較し、「無回答率」が下がり、児童が最後まであきらめずに取り組もうとする意欲が高まった。
 - ・第3学年は、NRT検査で平成24年度と比較し、国語科10.1ポイント、算数科で8.3ポイント偏差値平均が上昇した。
 - ・児童アンケートでは、「漢字の力が付いてきた」と回答した児童が全学年80%以上となり、漢字に対する苦手意識が低下した。
- (2) 学校評価（年2回）や児童による授業評価（各学期）の回答の分析・考察と実践成果の検証
 - ・授業アンケートで「授業がよく分かる」と回答した児童が70%から80%となった。
 - ・要因は、ユニバーサルデザインの活用による授業改善と考えられる。
- (3) 職員による研究の具体的な内容項目に関する達成度を把握し検証する。
 - ・「授業改善による学力の向上」の達成度が25%から63%となった。
 - ・要因は、研究内容の焦点化、全教員の共通理解と共通実践と考えられる。
- (4) 公開研究会又は研究成果発表会の開催
 - ・全教員の校内の研究授業はもとより、森町教育研究大会を含めて、年9回、授業を公開し、参加者から個に応じた指導を一層工夫する必要があるとの意見を得た。
- (5) 道教委作成の「分析ツール」を活用した点検評価の取組
 - ・国語は漢字の習得が課題であったが、単元テストで全国平均と同様という結果が得られた。
 - ・算数は四則計算が課題であったが、単元テストで全国平均と同様という結果が得られた。
 - ・質問紙調査で1日1時間以上勉強している児童が29%から39%となった。
 - ・質問紙調査で家で学校の宿題をしている児童が91%から87%となった。

(6) 短期・中期・長期の数値目標を踏まえた取組の点検・評価

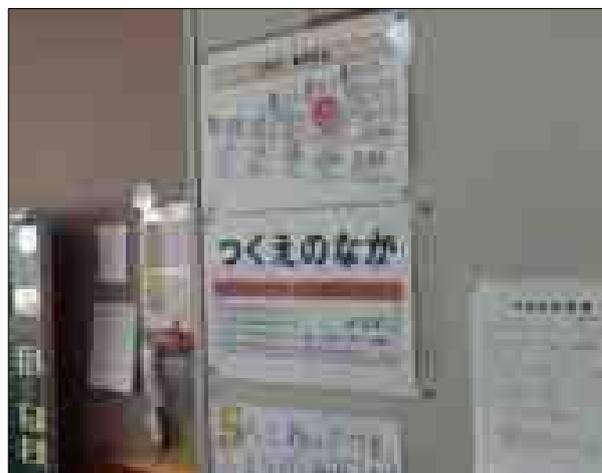
- ・短期～漢字小テストの正答率を90%以上とする。75%→90%
- ・中期～各単元テストの正答率を85%以上とする。75%→85%
- ・長期～年間まとめのテストの正答率を80%以上とする。70%→80%

4. 今後の課題

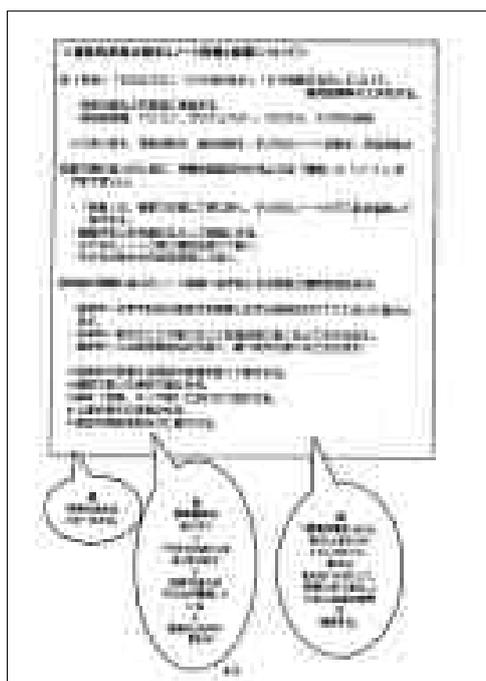
- 児童の生活や学習状況をきめ細かく把握するため、年間複数回の生活アンケートや学力検査等の実施を検討する必要がある。
- 各学年の学習内容を確実に定着させるため、基本的な学習過程に基づく授業を徹底するとともに、全学年において、国語科と算数科を中心に繰り返し指導を継続する必要がある。
- 教員の実践的指導力を向上するため、校内研修の一層の充実を図るとともに、公開研究会や各種研修講座などに積極的に参加する必要がある。
- 生活習慣や学習習慣の確立に向けて、学校がすべきこと、家庭が取り組むこと、地域に協力を依頼することを明確にし、学校・家庭・地域が一体となった取組を進める必要がある。



【家庭学習の手引き（抜粋）】



【教室前面の掲示】



【校内研修資料（ノート指導と板書）】

(様式3)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進校名	北海道森町立砂原中学校
------	-------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

- (1) 自ら考えをまとめ、的確に伝え・書き・表すなどの表現力の育成
- (2) 学力向上を図る教育課程や学習指導の充実
- (3) 教育課程外の補充的学習サポート
- (4) 推進地区における連携
- (5) 指導形態を位置付けた単元計画の作成
- (6) 学習規律の確立と家庭学習の定着
- (7) 家庭や地域との協働関係の構築
- (8) 学習環境の整備・充実
- (9) 文部科学省が実施する他の事業との効果的な連携
- (10) 研究成果の普及

2. 重点課題への取組状況

- (1) 自ら考えをまとめ、的確に伝え・書き・表すなどの表現力の育成
 - ・全教員が校内で研究授業を行い、ペアやグループによる学習活動を取り入れ、生徒が考える場面・伝え表現する場面を意図的に位置付けた。
 - ・生徒が自分の考えを相手に分かりやすく、根拠を明確にして発表することができるよう、発表ボードや模造紙、実物投影機、補助黒板を活用した。
- (2) 学力向上を図る教育課程や学習指導の充実
 - ・全国学力・学習状況調査の実施日に自己採点を行い、学年全体の状況を把握するとともに、生徒一人一人のつまずきの分析を行った。
 - ・「分析ツール」を活用して、全道と全国の比較から学力を分析し、重点的に指導する内容を明確にした。
 - ・授業の指導内容と関連を図った家庭学習の課題を与え、小テストを行い、学習内容の確実な定着を図った。
 - ・チャレンジテスト、北海道学力向上Webシステムを積極的に活用することにより、生徒の学習意欲が向上するとともに、全学年、全道得点比率が上昇した。

- 第1学年国語 第1回 93.0% → 第3回 98.8%
- 第2学年国語 第1回 65.7% → 第3回 83.1%
- 第3学年国語 第1回 76.6% → 第3回 88.2%
- 第1学年数学 第1回 73.1% → 第4回109.0%
- 第2学年数学 第1回 67.1% → 第4回 84.5%
- 第3学年数学 第1回 70.4% → 第4回 84.7%

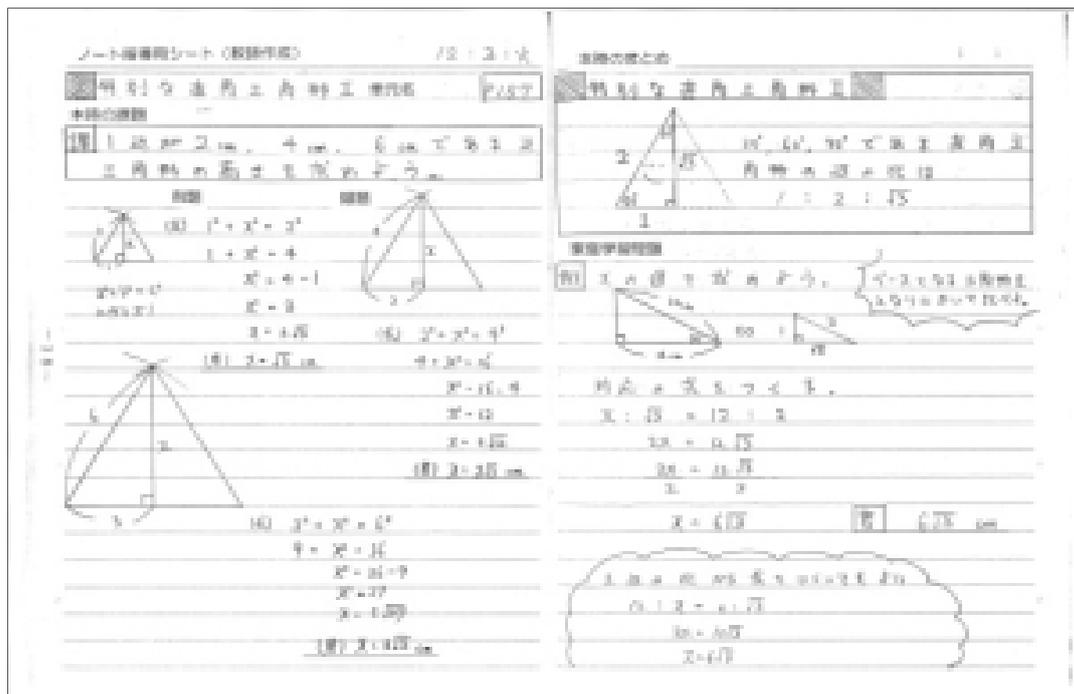
- ・各教科において、生徒が授業後、振り返った時に学習した道筋が分かるようなノート指導を徹底した。
- (3) 教育課程外の補充的学習サポート
- ・授業の復習や予習、宿題の未提出者の指導、各種検定の学習など、「放課後学習会」を115回実施した。また、長期休業期間は、学年単位、部活動単位で77回実施した。
 - ・長期休業中には、各教科で家庭学習の課題を与え、長期休業期間後、取組状況を定着度テストで把握し、補充的な学習を行った。
- (4) 推進地区における連携
- ・「砂原地区幼小中連携協議会」で交流した各学校の子どもの実態を踏まえ、本校の「学習常規」を改善した。
- (5) 指導形態を位置付けた単元指導計画の作成
- ・数学科と外国語科で免許所有者によるティーム・ティーチングを行い、個に応じた指導の充実に努めた。
- (6) 学習規律の確立と家庭学習の定着
- ・家庭学習の定着を図るために、「授業復習がんばり表」を作成・配付し、毎日、学級担任が家庭学習ノートを点検した。
- (7) 家庭や地域との協働関係の構築
- ・全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の分析結果を掲載した学校通信を校区内の全戸に配付し、保護者や地域住民に協力を働きかけた。
 - ・北海道教育委員会の「生活リズムチェックシート」を配付し、保護者の協力を得ながら、生徒の学習時間や睡眠時間を確保するよう指導した。
- (8) 学習環境の整備・充実
- ・各教科において、毎時間、10分程度でできる宿題（課題プリント）を与え、家庭における学習習慣の定着を図った。
- (9) 文部科学省が実施する他の事業との効果的な連携
- ・「指導方法工夫改善加配」の効果的な活用として、数学科と外国語科で免許所有者による習熟の程度に応じた指導を行った。
- (10) 研究成果の普及
- ・本年度の研究成果を町内の学校はもとより、管内の学校を対象とした「研究成果発表会」を実施する。
 - ・町校長研修会の機会を活用して、各学校の校長を対象としたプレゼンテーションを実施する。

3. 調査研究の成果の把握・検証

- (1) 全国学力・学習状況調査結果の分析・考察（平成26年2月に第3学年を対象に再調査を実施）
 - ・国語は55%の生徒の平均正答率が上昇し、正答率は74.5%から80.2%、数学は47%の生徒の平均正答率が上昇し、正答率は62.9%から71.3%に上昇した。
 - ・生徒質問紙は、朝食を全く食べない生徒が0%、4時間以上TVゲームをする生徒が5.2%減少、2時間以上勉強する生徒が21.1%増加した。
- (2) 学校評価（年2回）や生徒による授業評価（各学期）の回答の分析・考察と実践成果の検証
 - ・授業アンケートで「授業がよく分かる」と回答した生徒が28%から51%となった。
 - ・要因は、生徒による授業評価を活用した指導方法の工夫改善に努めたためと考えられる。
- (3) 職員による研究の具体的な内容項目に関する達成度を把握し検証する。
 - ・「基礎・基本の定着」の達成度が68%から76%となった。
 - ・要因は、生徒による授業評価を活用した指導方法の工夫改善に努めたためと考えられる。
- (4) 公開研究会又は研究成果発表会の開催
 - ・全教員の校内の研究授業はもとより、森町教育研究大会を含めて、年10回、授業を公開し、参加者から授業改善が学校全体の取組となっているとの意見を得た。
- (5) 道教委作成の「分析ツール」を活用した点検評価の取組
 - ・国語は書くことが課題であったが、単元テストで記述式の無回答率が低下するという結果が得られた。
 - ・数学は数と式が課題であったが、単元テストで四則計算の得点率が向上するという結果が得られた。
 - ・質問紙調査で1日1時間以上勉強している生徒が50%から68%となった。
 - ・質問紙調査で家で学校の宿題をしている生徒が84%から90%となった。
- (6) 短期・中期・長期の数値目標を踏まえた取組の点検・評価
 - ・短期～チャレンジテスト国語の得点比率を90%以上とする。76%→76%
チャレンジテスト数学の得点比率を90%以上とする。70%→65%
 - ・中期～チャレンジテスト国語の得点比率を100%とする。76%→88%
チャレンジテスト数学の得点比率を100%とする。70%→85%
 - ・長期～全国学力・学習状況調査の国語の慣用句に関する問題を90%以上とする。
75%→80%
全国学力・学習状況調査の国語の四則計算に関する問題を80%以上とする。
63%→81%

4. 今後の課題

- 生徒の生活や学習状況をきめ細かく把握するため、年間複数回の生活アンケートや学力検査等の実施を検討する必要がある。
- 書いたり、話したりする力に課題があることから、言語意識を明確にした言語活動を一層充実させる必要がある。
- より分かりやすい授業にするため、各教科の特性に応じたノート指導の在り方、板書計画、発問について研究を継続する必要がある。
- 「放課後学習会」や長期休業期間を活用し、下位層の生徒に対して、一層きめ細かな指導を継続して行う必要がある。
- 学習習慣の確立に向けて、家庭学習ノートの点検を継続するとともに、宿題や課題の未提出者への対応を学校として明確にする必要がある。



【生徒のノート】

1年数学夏休み明け定期テスト

2018. 8. 20 (木) 【10分】
 2018. 8. 27 (木) 【7分】

夏休み明け基本検定

1年A組 出席番号 [] 番 氏名 []

1. 次の数量を、文字を使った式で表しなさい。(ただし、必要に応じて単位をつけること) (各16点)

(1) x の2倍と y の3倍の和

(1)	
(2)	
(3)	

(2) 十の位の数が a 、一の位の数が b である3けたの自然数

(3) x 枚の紙がある。40人の子供に1人 y 枚ずつ配ったときの残った枚数

【定着度テスト】

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進地区名	雄武町
-------	-----

1. 重点課題

推進地区における学力の状況を踏まえ、学校のみならず家庭や地域との連携を図りながら、町全体として取組が推進できるよう、次の4点を重点課題として、課題解決に向けた取組を進めた。

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るための指導の改善
- (2) 言語活動の充実による思考力・判断力・表現力等の伸長を図る授業モデルの開発
- (3) 教育課程外の補足的学習サポート
- (4) 家庭や地域との協同関係の構築

2. 重点課題への取組状況

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るための指導の改善については、北海道教育庁オホーツク教育局との連携を図り、指導の改善に努めた。
- (2) 言語活動の充実による思考力・判断力・表現力等の伸長を図る授業モデルの開発については、平成25年度学力向上フォーラム(秋田県)、第44回「算数授業研究」公開講座(筑波大附属小学校)等の研修に出席し、授業モデルの開発に努めた。
- (3) 教育課程外の補足的な学習サポートについては、単元終了時にまとめプリントを実施し、平均正答率が低い設問及び定着が必要な基礎的・基本的な事項の洗い出しを行うとともに、マスタープリントを作成し、宿題の形で繰り返しプリントに取り組むなど、同じ内容の学習を反復して行うことによって学習内容の定着を図った。
- (4) 家庭や地域との協同関係の構築

推進地区、推進校で連携し雄武町学力向上推進協議会を設立し、北海道教育庁学校教育局次長を招聘し、家庭や地域との協同関係の構築を推進するため、教育講演会を開催した。

3. 調査研究の成果の把握・検証

- (1) 全国学力・学習状況調査及び推進校における学力テスト等の結果の分析・考察と授業改善に向けた指導については、全国学力・学習状況調査結果を分析し、教科に関する調査、児童・生徒質問紙調査、学校質問紙調査を分析し、全国、上位県、全道、管内との比較を行うとともに、前年度の対象学年などとの差異について、分析・検証した。
- (2) 推進校における短期・中期・長期の数値目標を踏まえた取組に対する点検・評価については、雄武町学力向上推進会議（2回開催）において、調査研究の進捗状況、調査研究の成果について、点検を行った。
- (3) 学校評価や児童生徒による授業評価の回答の分析・考察と実践成果の検証
単元終了時に実施した、まとめプリントの回答分析として、領域別、観点別、学力層別の階層維持及び上昇率を分析しているほか、単元テストの解答分析として、正答率、平均点からの分析、苦手としている問題を分析することにより、重点的に復習を進めるなど改善策を見出している。
- (4) 推進校による公開研究会の実践資料等の収集
推進校による公開研究会の実践資料等の収集については、各推進校、それぞれで収集し、互いに情報共有していることを確認している。
- (5) 授業研究や研究報告の評価及び課題の把握と改善策の検討
北海道教育庁オホーツク教育局の指導、助言のもと、課題が明確となり、改善について検討を進めている。
- (6) 道教委作成の「分析ツール」を活用した点検評価の取組
分析ツールを活用して、教科別のレーダーチャートの分析を行い、推進校における研究資料として活用されているほか、雄武町学力向上推進協議会の資料としても活用した。
- (7) 北海道教育庁オホーツク教育局と連携した推進校への定期的な学校訪問（年3回以上）による指導・助言
年3回以上の学校訪問の計画は達成された。（5回）

4. 今後の課題

- (1) 次年度以降取り組むべき課題
 - ・取組期間が9月から12月までと短かったことから、もう少し長い期間で調査研究に取り組む必要がある。
 - ・今回は算数（数学）に特化した調査研究となっており、他教科についての研究を行う必要がある。
 - ・マスタープリントを通した取組は7割の児童に有効性が認められたが、3割の児童には有効性が見出せていないことから、有効性が見出せなかった3割の児童への手立てについての研究が必要である。
- (2) 課題を解決するための手立て等
マスタープリントを通した取組において、有効性が見出せなかった3割の児童に対して、教育課程及び学校体制を整え、改善に向けて取組を推進するとともに、平成26年度以降、日常的な活用を町内全ての小・中学校において実施することを目指していきたい。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進校名	北海道雄武町立雄武小学校
------	--------------

1. 重点課題

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るための指導の改善
- (2) 教育課程外の補充的学習サポート
- (3) 単元の指導計画を見直し、基礎的・基本的な知識・技能の定着や思考力・判断力・表現力等の育成を図る指導場面と指導内容の重点化
- (4) 家庭や地域との協働関係の構築
- (5) 文部科学省が実施する他の事業との効果的な連携
- (6) 研究成果の普及

以上の6項目の重点課題のうち、とりわけ基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ることが喫緊の課題であることから、(1)及び(4)に焦点を絞り、次のとおり取組の重点を定めた。

◇取組の重点 『脳科学の知見をふまえた記憶を定着させる学び直しの工夫』

脳内の器官である『海馬』の機能に着目し、反復して同じ内容の学習を行うことで記憶の定着、学習内容の定着を図ることとした。

1カ月をかけて必要な記憶と不要な記憶を整理
「生きるために必要」と判断した情報だけを保存

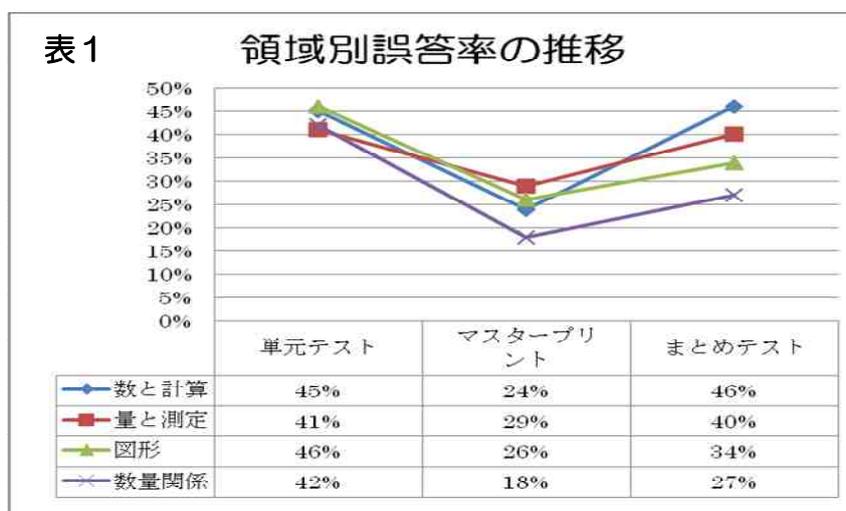
研究仮説
1カ月間、定期的に同じ内容を学習することで海馬は
「生きるために必要な情報」と判断し記憶の定着が図られるだろう。

- ② 町内の各校・教育委員会と企画・運営を行った保護者・教職員・地域住民を対象とし、本道の児童が抱える課題、学力向上への必要感の共有を図るため、講演会を実施した。
- ③ 生活リズムチェックシートの活用により、保護者や児童に対して、家庭における生活習慣の意識付けを図った。

3. 調査研究の成果の把握

(1) 領域別誤答率の比較 (表1)

調査対象学年の合算値の平均を求めると、「図形」「数量関係」「量と測定」領域では、単元テストの誤答率よりも2学期まとめテストの誤答率が低くなっている。また「数と計算」においても、単元テストと2学期まとめテストの誤答率の差が1ポイントにとどまっている。



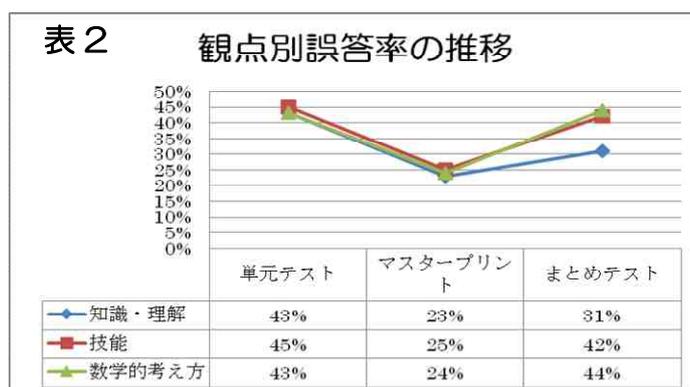
2学期まとめテストについて

2学期まとめテストについては、マスタープリントの内容に即して作成した。本校児童の実態と照らし合わせて、市販のまとめテストに比べ難易度を上げ、平均到達度は70と設定した。

(2) 観点別の誤答率の比較 (表2)

「知識・理解」については、2学期まとめのテストの誤答率は、単元テストと比較して12%減り、最も効果が現れた。「技能」についての誤答率は、3%減である。「数学的な考え方」についての誤答率は1%増えているものの、概ね取組が有効であることを示している。

(1)(2)ともにグラフ上では大きな成果は感じられないが、「2学期まとめテスト」については難易度を高く設定しており、数値以上に高い有効性を確認することができた。



(3) 学力層別の階層維持及び上昇率

次頁の表3は単元テストの平均到達度を基準にA～Gまで階層を設定し、まとめテストの結果において、単元テストよりも階層が上がった児童及び階層を維持できた児童の割合を示したものである。

単元テストの到達度が平均を越える階層（上位層A～中間層B）の児童の88%に階層の維持及び上昇が見られた。この階層の多くは集団の到達度を越えている児童が多く、階

層維持・上昇率ともに約9割と高い。平均直下の中間層Cにおいても、約6割の児童に階層の維持、上昇が見られた。

上位層A～Cまでの児童は全体の90%にあたり、取組の有効性が認められた。

表3 単元テスト平均到達度を基準とした取組後の学力階層の維持・上昇率

単元テスト 平均到達度 を基準とし た学力層	2学期まとめテストにおける階層維持及び上昇率						
	全体	人数	3年	4年	5年	6年	
上位層	A(平均比～+10%以上)	96%	23/24	/	100%	92%	100%
中間層	B(平均比0～+9%)	83%	30/36	94%	80%	67%	63%
	C(平均比0～-9%)	59%	13/22	29%	67%	60%	67%
	D(平均比-10～-19%)	60%	3/5	100%	50%	50%	0%
下位層	E(平均比-20～-29%)	25%	1/4	0%	/	0%	100%
	F(平均比-30～-39%)	25%	1/4	/	0%	0%	50%
	G(平均比-40%以下)	100%	2/2	/	/	100%	/

単元テスト平均到達度ライン

全体の階層維持・上昇率＝75%（97名中73名が階層の維持及び上昇）

(4) 第6学年の教研式標準学力検査（NRT）における考察

上記データは単元テストが終了した時点での理解度がマスタープリントの取組を経て2学期まとめテストの時点でどの程度記憶されているかを検証したものであり、判定結果は単元テスト終了時の理解度に大きく左右される側面がある。

そこで、客観性及び信頼性を高めるために、第6学年のみではあるが、教研式標準学力検査（NRT）を2学期末に実施し、取組期間中に学習した内容がどの程度定着しているかを検証した。

① 単元テストとNRTの対比方法

2学期まとめテストの出題範囲5単元に関わる19の設問について誤答率を求めA～Cの5段階の判定を行うとともに通過率指数を求めた。

通過率指数＝本校6学年通過率/全国通過率×100 ※双方の通過率が同じであれば指数は100となる

② 結果考察

- ・領域別・観点別で見ると（表4）、通過率指数が100以上の項目は、領域別で3項目、観点別で1項目であった。
- ・19問の設問中、通過率指数が100を越えた設問は全体の68%であり、平均通過率指数は115となった。
- ・調査対象児童の標準偏差値については、昨年度の52.6から55となり、2.4ポイント上昇した。
- ・領域別では数量関係、観点別では数学的な考え方について課題は残るものの、マスタープリントを通した取組は有効であったといえる。

表4 領域別・観点別誤答率の推移

領域	単元テスト	2学期まとめテスト	NRT	判定	通過率指数
数と計算	46%	30%	17%	A+	134
量と測定	57%	38%	47%	A	122
図形	51%	36%	37%	A	110
数量関係	54%	21%	41%	A	88

観点	単元テスト	2学期まとめテスト	NRT	判定	通過率指数
知識・理解	44%	15%	35%	A	97
技能	51%	34%	27%	A	128
数学的な考え方	60%	39%	68%	C	90

(5) 学校評価アンケートから

本調査はマスタープリントを宿題として取り組ませていることから、家庭での取組が基盤となる。前出2-(9)にもあるように、学習習慣の形成及び取組の周知について啓発を行った結果、学校評価アンケート（表5）の「あなたは、家で勉強をしていますか。」「お子さんは宿題や家庭学習をしていますか。」という設問に対して、A（当てはまる）と回答した児童・保護者が3ポイント上昇し、一定の成果が見られた。

表5 学校評価アンケート結果

設問11	児童	保護者
24年度（2学期末：12月下旬実施）	89%	78%
25年度（1学期末：7月下旬実施）	92%	
25年度（2学期末12月下旬実施）	92%	81%↑

児童：「あなたは、家で勉強をしていますか。」

保護者：「お子さんは宿題や家庭学習をしていますか。」

※回収率 児童100%（166/166）保護者（148/166）

※評価 4段階評価 到達度設定（A=80%以上、B=60%以上、C=50%以下、D=30%以下）

4. 今後の課題

- 仮説については概ね実証され、この方法では約7割の児童には有効であると認められる。
- しかし、対象人数の約3割の児童には取組の有効性が認められなかった。それらの児童の傾向は、以下の3つに大別される。
 - ・「マスタープリントの取組の継続ができない」
 - ・「マスタープリントの取組では学習内容を記憶できない」
 - ・「単元テストの段階で理解が不十分であり、マスタープリントそのものが理解できない」
- 取組が継続できない児童及び学習内容を記憶できない児童に対しては、家庭での学習環境の整備や、学習に対する姿勢や宿題への向き合い方などの情意的な側面での支援が必要な児童である。保護者への情報発信を丁寧に行うとともに、児童の意識の高揚が図られるよう日常的な指導の充実を図る必要がある。
- 単元テストの段階で理解が不十分な児童に対しては、全校的な取組による補充的な学習サポートの一層の充実、個別指導の時間の確保など、教育課程や学校体制を整え、改善に向けた取組を推進する必要がある。
- 学校評価の自由記述では、教職員からは「既習事項の指導の重要性を再認識することができた」「下位層の児童にも有効な側面もみられた」といった声も聞かれたものの「学ぶ姿勢や学び方に課題を残す児童については効果が薄い」という指摘もあった。
- 教員の指導力向上や授業改善、学習規律の徹底など課題も多いことから、本校の重点課題について改めて取組を整理し、マスタープリントの取組と両輪で推進していく必要がある。
- この取組は今後も継続して実施し、来年度以降、「マスタープリント」を日常的に活用できるよう、算数科の全学習内容に対応したものを整備するとともに、他教科での実践についても同様な取組を積み上げていきたい。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進校名	北海道雄武町立雄武中学校
------	--------------

1. 重点課題

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るための指導の改善
- (2) 教育課程外の補充的学習サポート
- (3) 互いの考えを伝え合う活動を通じた思考力・判断力・表現力等を育成する指導の工夫
- (4) 家庭や地域との協働関係の構築
- (5) 文部科学省が実施する他の事業との効果的な連携
- (6) 研究成果の普及

以上の重点課題を踏まえ、課題の解決を図るための具体的な手立てとして、次の2点を取組の重点とした。

- | | |
|---------|------------------------------|
| ◇取組の重点1 | 『脳科学の知見をふまえた記憶を定着させる学び直しの工夫』 |
| ◇取組の重点2 | 『年間を通じた学力向上の取組』 |

2. 重点課題への取組状況

- (1) 脳科学の知見をふまえた記憶を定着させる学び直しの工夫

脳科学的な記憶のシステムの研究が進み、解明されつつある。そこで、脳科学の知見から効果的に学習する方法を取り入れることにより、生徒の学力向上を目指した。

実践に当たっては、以下に示す復習に関する3つのポイントを踏まえて取り組み、その効果を生徒に実感させることを通して、生徒自身が日常の学習にも生かすことができるようにした。

ポイント1：復習のタイミング

「海馬」の性質上、1ヶ月以内に復習を繰り返す必要がある。このことを踏まえ、効果的な復習のプランは、学習をした翌日に1回目、その1週間後に2回目、その2週間後に3回目、その1ヶ月後に4回目というように全部で4回の復習を、少しずつ間隔をあげながら全2ヶ月をかけて行う。

ポイント2：復習の内容

復習の効果は同じ内容のものに対して生じることから、同じ内容を繰り返すことが肝心。

ポイント3：入力より出力が重要

教科書や参考書を何度も見直すより、問題集を何度も解く復習方法が効果的。

参考「受験脳の作り方 脳科学で考える効果的学習法」池谷裕二著 新潮文庫

本実践の具体的な実施期間や実施方法等は次のとおりである。

- ① 期間：平成25年2学期
- ② 学年：1年生40名、2年生27名、3年生33名
- ③ 教科：数学
全国学力・学習状況調査の結果から、数学については全国平均を下回っており、TTや学習支援員などを配置するなど学校として力を入れている。
- ④ 単元：1年生「比例と反比例」 2年生「1次関数」 3年生「関数 $y = ax^2$ 」
全国学力・学習状況調査の結果から、各学年とも「関数」の分野について全国平均を下回っていることから、「関数」の分野について実施することとした。
- ⑤ 内容：各学年20問の単元テストとして実施
「見方や考え方」「技能」「知識・理解」の3つの観点を踏まえ、基礎的・基本的な事項を重視した内容とした。
- ⑥ 実施のタイミング：
 - 1回目 単元終了の翌日 30分間
 - 2回目 1回目の約1週間後 20分間
 - 3回目 2回目の約2週間後 20分間
 - 4回目 3回目の約1か月後 20分間
- ⑦ 実施方法
 - ・各学年上記のタイミングで同じ単元テストを実施した。
 - ・実施時間については、概ね全員が最後の問題まで取り組める時間に設定した。
 - ・時間割の関係上、数日前後することはあった。
 - ・1回目、2回目のテスト返却時に解説を行った。

(2) 年間を通した学力向上の取組

- ① 学習の手引の活用
 - 内容：
 - ・授業の受け方 ・成績の付け方 ・各教科の授業について(持ち物、ノートの取り方、予習復習、評価資料など) ・家庭学習のすすめ ・各教科の学習法 ・テストの受け方
 - 活用法：
 - ・4月の全校集会で一斉指導 ・4月の学活で学級指導 ・各教科の最初の時間
- ② 家庭学習ノートの継続的な取組及び内容の充実
 - ・「学習の手引き」を参考にしながら、自分に必要な勉強をノートにやって毎日提出
 - ・担任・副担任は内容をチェックして、必要に応じてコメントを記入
 - ・提出状況をチェックするなど、習慣化させるための支援の充実
- ③ 生活記録を活用した学習習慣・生活習慣の形成
 - ・市販の「年間の学習・生活記録(全教材)」を全生徒が購入し、家庭での様子を毎日記録
担任は必要に応じてコメントを記入
 - ・生徒と担任のコミュニケーションツールとしても活用

- ④ T・T、習熟度別授業、学習支援員の効果的な活用
- ・数学・英語に各学年T・Tを配置
 - ・数学については習熟度別授業を適宜実施
 - ・雄武町から配属される学習支援員が、授業中支援が必要な生徒に対して適宜支援を行う
- ⑤ 放課後学習会・夏休み学習会・冬休み学習会
- ・基本的に参加は任意とし、事前に希望調査をとって実施
ただし、補充的な学習が必要だと思われる生徒については担任が個別に参加を促した
 - ・放課後学習会 2学期(10月～12月)
 - 第1学年 8回 数学基礎コース
 - 第2学年 各コース8回 数学基礎コース、英語基礎コース
 - 第3学年 各コース8回 数学受検コース、英語受検コース、理科 or 社会受検コース
 - ・夏休み学習会
 - 第1・2学年 夏休み課題コース 3日間(13:00～13:50、14:00～14:50)
 - 第3学年 夏休み課題コース 5日間(13:00～13:50、14:00～14:50)
 - 応用コース 5日間(13:00～13:50、14:00～14:50)
 - ・冬休み学習会
 - 第1・2学年 基礎コース 4日間 数学・英語各50分(13:30～14:20、14:30～15:20)
 - 第3学年 基礎学力習得ゼミ・受検対策ゼミ 8日間(9:00～12:00)
※基本的に自分で課題を設定し、自分で勉強する
基礎学力向上講座・受検対策講座 4日間(13:30～14:20、14:30～15:20)
※数学、英語について講義形式で実施
- ⑥ 校内研究授業の推進・充実
- ・全ての教員が1年間の間に指導案を作成し、研究授業を実施
 - ・年間2回は全校体制で研究授業を実施し、研究協議を実施

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 脳科学の知見をふまえた記憶を定着させる学び直しの工夫

各学年とも、1回目から4回目の正答率や平均点を比較すると明らかな有意差が見られた。

※ここでは特に顕著であった2学年について詳しく紹介し、1学年、3学年については単元テストの正答率、平均点のみを掲載する。

① 単元テストの内容

- | | |
|---|---|
| 1 | 1次関数の式が与えられたところから |
| | ① 変化の割合を求める問題 ② x の値の変化から y の増加量を求める問題 |
| | ③ x の増加量から y の増加量を求める問題 |
| 2 | ①～③1次関数の式が与えられたところからグラフをかく問題 |
| 3 | ①～③直線のグラフから1次関数の式を求める問題 |
| 4 | 1次関数の式と x の変域から y の変域を求める問題 |
| 5 | 1次関数の式を求める問題 |
| | ① 変化の割合、 x の値が0、 y の値 ② 傾きと切片 ③ 傾きと1つの点 |
| | ④ 直線に平行と1つの点 ⑤ 変化の割合、 x の値、 y の値 ⑥ 2つの点 |
| 6 | 2直線の交点の座標を求める問題 |
| 7 | 長方形の辺上を動く点の問題 |
| | ①② 三角形の面積について x の変域を示し y を x の式で表す ※変域と式の完全解答 |
| | ③ 面積の変化をグラフに表す |

② 単元テストの結果

【2 学年】

(資料1 参照)

回数	実施日	人数	1			2			3			4	5						6	7			平均
			①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	①	②	③	④	⑤	⑥	①	①	②	③	
1	10/22	23	48	61	35	96	91	57	87	96	87	26	78	91	74	57	43	43	39	35	35	39	12.2
2	10/29	25	88	88	88	92	100	88	92	96	100	76	84	92	84	72	60	72	64	44	44	76	16.0
3	11/12	25	76	72	80	100	96	84	96	100	92	64	84	92	80	76	68	68	52	56	56	76	15.7
4	12/9	25	92	76	84	96	92	84	100	88	100	60	96	96	88	84	72	68	68	56	64	80	16.4

正答率(%)

正答数(問)

③ 結果の考察

- ・平均正答数については、1回目から2回目（1週間後）で3.8ポイント増であった。このことについては、同じテストを比較的短い間隔で実施していることから想定できる結果である。
- ・2回目から3回目（2週間後）で0.3ポイント減であった。このことについては、「忘れてしまう」という脳の働きを踏まえるとポイント減が想定されるが、1回目と比較してポイント増で推移していることから、学び直しとしてはこの段階で効果があると考えられる。
- ・さらに、3回目から4回目(約1ヶ月後)で0.7ポイント増となっており、2週間の間隔でポイント減だったものが1ヶ月の間隔でポイント増となっている。このことは学び直しの効果として、大きな成果と言える。
- ・問題別に見てみると、1回目で最も正答率の低かった「4①」の26%が76%→64%→60%といった推移を見せているが、従来、苦手とする生徒の多い変域の問題について、1ヶ月後に60%の正答率を維持していることは成果と言える。また、「7①」に関しては最終的な正答率が56%と6割を切っている。最後まで理解が不十分であった生徒が多かったということを受け止め、重点的に指導していく必要がある。
- ・基礎・基本の定着ということから、「2①～③(グラフをかく)」「3①～③(グラフから式を求める)」「5①～⑥(1次関数の式を求める)」の正答率がいずれも高い数値で終えていることから、定着が図られていると考えられる。
- ・4回のテスト全てを授業の始めに行ったが、「答えを暗記して書いている」といった生徒はおらず、毎回計算をするなどして自分の力で解いていた。学び直しの趣旨を理解し、取り組んだ結果、このような有意差が見られたことは、生徒にとっては大きな成果だと考えられる。

④ 他学年の結果

【1 学年】

(資料2 参照)

回数	実施日	人数	1			2				3						4				5			平均
			①	②	③	①	②	③	④	①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	①	②	③	
1	11/12	35	66	86	23	63	34	29	14	86	40	29	23	31	23	63	31	29	31	20	66	60	8.5
2	11/19	35	69	80	37	74	43	40	31	89	60	46	46	51	40	69	46	46	49	40	69	74	11.0
3	11/29	37	86	97	57	97	65	57	49	95	81	70	89	70	70	89	73	89	76	76	89	97	15.7
4	12/16	35	86	97	63	94	71	80	66	91	80	69	86	71	77	91	80	77	71	80	97	100	16.3

【3 学年】

(資料 3 参照)

回数	実施日	人数	1				2		3		4			5			6			7			平均
			①	②	③	④	①	②	①	②	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	
1	10/22	31	35	71	65	65	87	74	32	19	55	29	32	61	74	39	26	10	10	29	3	6	8.2
2	10/29	30	87	97	97	93	97	83	63	60	77	77	73	93	90	67	73	47	53	57	57	53	14.9
3	11/15	31	80	93	97	87	90	83	30	57	67	47	60	80	77	53	53	33	37	43	37	37	12.4
4	12/9	32	87	90	87	94	90	90	52	65	84	74	87	97	94	71	71	61	48	52	48	65	15.1

- ・平均正答数は1回目と4回目の比較で1学年、3学年それぞれ7.8ポイント、6.9ポイントと大きく上昇しており、定着が図られていると考えることができる。
- ・第1学年においては、4回目のテストで全ての問題について60%以上の正答率となっており、1回目に20%前後の正答率であった問題も大きく上昇している。第3学年についても、全ての問題で正答率が上昇しており、学び直しの効果として捉えることができる。
- ・第3学年の正答率50%前後の問題については、今後重点的に復習をするなどの手立てが必要である。

(2) 年間を通した学力向上の取組

- ・それぞれの取組に関して、今年度初めて行ったことではなく、継続して行っている取組であり、個別に成果の検証をすることはできないが、授業態度の改善、家庭学習時間の増加など年々確実に生徒の意識は変化し、学習に取り組む姿勢は向上している。

(3) 学力検査の結果による検証

今年度2回の「教研式標準学力検査 CRT(国語・数学・英語)」を実施し、学年の得点率と全国得点率との比較やそれらの全国比の推移から取組の成果を検証した。ここでは、数学についてのみ掲載する。

【H25年度 教研式標準学力検査 CRTの結果】

学年		1 学年			2 学年			3 学年			
教科	領域	学年 得点率	全国 得点率	全国比	学年 得点率	全国 得点率	全国比	学年 得点率	全国 得点率	全国比	
数学	数と式	4月	62.8	62.0	101	60.1	60.8	99	58.6	58.7	100
		12月	62.9	59.3	○106	65.4	60.3	○108	59.2	63.5	×93
	図形	4月	63.0	63.0	100	54.5	54.5	100	64.1	64.2	100
		12月	59.1	54.5	○108	75.5	64.8	○117	60.5	59.4	○102
	関数	4月	57.8	56.1	103	48.5	45.3	107	54.9	53.6	102
		12月	56.1	45.3	○124	62.0	51.7	○120	54.8	55.4	×99
	資料の活用	4月	62.5	57.5	109	43.0	46.2	93	38.5	47.2	82
		12月									

- ・第1・2学年においては、全ての領域で12月の全国比が4月の全国比を上回り、取組の成果が見られた。
- ・特に、「関数」の領域に関しては「脳科学的な視点からの取組」で重点的に行った結果が顕著に表れ、1学年21ポイント増、2学年13ポイント増と4月からの差は歴然であり、全国比も大きく上回る結果となった。
- ・一方、3学年については、目立った成果は見られず、「関数」の領域に関しても十分な成果は得られないという結果となった。

4. 今後の課題

- 今年度の取組を通して、脳科学の知見をふまえた学び直しによる学力向上は十分期待できることが実証された。
- しかし、全ての教科、単元について教科担任主導でこのような取組を実践するのはとても負担が大きく、授業の中で単元テスト等を何度も行うとなると、時数上の負担も大きい。
- こうしたことから、実践に当たっては、次の2点が重要となる。
 - ・その単元で最も重要な内容をまとめたプリントをタイミング良く取り組ませること。
 - ・家庭でもしっかりと取り組める学習環境を整えること。
- また、何より重要になるのが、生徒一人一人の学習意欲であり、学習習慣である。
- 生徒に意欲をもたせること、学習習慣を身に付けさせること、効果的な学習方法を教え、実践させることが、学力向上には不可欠である。
- そのためには、継続して、根気強く生徒や保護者に学習の重要性を訴えかけていくことが何よりも重要な課題である。
- さらに、教職員が共通認識に立って学力向上に向けた取組を実践することも重要である。
- 互いに助け合い、刺激し合いながら目の前にいる生徒に力を付けさせていかなければならない。